I 1970 年代の講演録

1-1　悔い給う神

1972年12月17日、石原[1]聖書集会クリスマス講演会において語りしもの

多くの人々にとって、信仰を持つことに対する最大の障害は信仰が科学的でないということである。奇蹟が書いてあるから聖書は信じられないと言う人が多い。しかし、これはそういう人々が十分に考えていないことを告白していることになる。信仰と科学とは衝突するものではない。科学は、奇蹟はめったにおこらないと言っているだけで、おこってはならない理論的根拠はない。この事をここで論ずる予定ではないが一言だけいうと、人間の中で最大の科学者はニュートン[2]である。ニュートンは立派な信仰を持って居った。晩年には聖書の註解書を書いた。それである人々が、ニュートンは晩年になって耄碌したので、信仰を持つようになったのだと言っている。しかし、実はニュートンは信仰を持っていたから、あのような偉い業績をあげたのである。それ故ニュートンを耄碌したという人の方が実は耄碌しておるのである。信仰を否定さえすれば科学的であるかの如く考える人が多いが、そのような学者は大きな誤りをしているのである。

信仰を持つに一番大きな障害は、神は不完全ではないかという事である。もし神が不完全であられるなら、神が完全であられるように完全であれという聖書の言葉が無意味になる。山上の垂訓[3]の中でキリストは「あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となりなさい。」と言われたが、この言葉が無意味になる。罪ということも完全でいまし給う神を考えてはじめておこることである。それ故に神は全智全能であられると考えなければならない。この全能に欠けておる点があるなら、神が神でなくなる。私共の信仰が無になってしまう。神の全能に欠けている所があるとするならば、その事が信仰の最大の障害である。その他のことではいくら反対者が信仰をこわそうとしても、決してこわれるものではない。

ところが驚くべきことには、聖書は神が宇宙を創造しそこなったと書いている。創世紀 6 章 5 節～ 7 節に「主[4]は人の悪が地にはびこり、その心に思いはかることが、いつも悪い事ばかりであるのを見られた。主は地の上に人を造ったのを悔いて、心を痛め『私が創造した人を地のおもてからぬぐい去ろう。人も獣も、這うものも、空の鳥までも。私はこれらを造ったことを悔いる』と言われた。」と記されている。こうしてノアの洪水がおこったのである。これは即ち、神の天地創造は失敗であったという事である。しかも神が創造にあたって、甚だよかったといわれておるのにである（創世記 1 章 31 節）。後悔なさるような創造をよしと認められたのであるから、神の全智も欠けた所があるという事になる。それ故に人間的に考えるならば、この創世記の言葉は信仰をその根底から打ち砕くものである。この疑問に打ち勝ってはじめ

て、信仰を理性的基礎の上に確立することが出来る。神が悔い給うたという事は、神の全智全能を制限するものではなくて、実は神が完全に全能であられるから悔い給うように創造されたのである、ということをこれから述べたいと思う。

創世記 1 章 27 節に神のかたちに人を創造されたとある。これを素朴的にとれば神も人間のようなお顔をしておられ、手や足を持っておられ、それに型どって人間を創造されたから、人間がこのような形をしておるのだということになる。多分これは誤りではないと思われる。と言うのは被造物[5]の中で人間が一番美しい。八頭身の美人もおれば、大根足の婦人もおるわけであるが人間全体はとても美しい。それ故に裸体画がよく画かれるのである。必ずしも色の白い八頭身の婦人だけが美しいとは限らないのであって、ゴーギャン[6]は赤銅色[7]をした大根足のタヒチ島の婦人の美しさを画いている。それ故に神も人間を一層美しくしたような姿をしておられ、それに型どって人間が創造されたと考える事は不自然ではない。しかし人間が神に最もよく似ておる点は、人間が人格を持っているという事である。神は汎神論[8]的な、または単なる自然法則というようなものではなくて、人格的存在である。そして人間を愛しておられるという事は私共の信仰の根本である。人格という訳がよくないので、内村先生は三位一体[9]を論ずる時にペルソナ[10]という言葉を用いている。ペルソナは被造物の中で人間だけが持っているので人格と訳したのであるが、実はこれは神的なものである。そして人格的存在とは自由意志を持っているという事である。個性もそれから生ずる。人間が神に型どられて創造されたという事の一番大事な点は、自由意志を与えられているということである。神に背いて罪を犯そうとすれば罪を犯せる、そういう自由意志を持っていて、その自由意志をもって罪を悔い改め、十字架にすがり、罪を贖っていただくというのが信仰である。テニソン[11]のイン－メモリアム[12]の序詩に

> Our wills are ours, we know not how;
> Our wills are ours, to make them thine.
> 我々の意志は我々のもの、どのようにしてだか知らない。
> 我々の意志は我々のもの、その意志をあなたのものとする為に。

とある。これが何故人間が自由意志を与えられているかという事を最もよく説明している。またこの世に罪が存在する理由である。

このようにして自由意志を持っている人間で天国が構成されるのである。天国を構成する人間が一人一人個性を持っておって、皆各々異なっておって、各々その特長をもって天国を一層美しい所とする。丁度秋になって、全山紅葉になって、非常な美しさを現出するが、その一枚一枚のもみじの葉が皆異なっておる。そして、それらの葉をつけている一本々々の木がまた各々異なている。それであのように美しいのである。

もし、そのすべての葉が色も形も全く同じであったり、一本一本の木が同じであったらあんなに美しくはならない。デパートや観光地の駅などで季節が来ると造花で飾るけれど、それは少しも美しくない。何故かというと、その一つ一つに生命がないから、個性がないからである。この事は三谷隆正先生[13]が 1929 年（昭和 4 年）頃「聖書之研究」に発表なさった「神の国の観念について」という論文によって教えられた事である。内村先生が宇宙の完成を祈ると言って死んで行かれたが、その完成された宇宙とはこのような完全なる美しさをもったものである。

この事は黙示録の終わりの言葉からも想像される。黙示録 21 章 24 節に「諸国民は都の光の中を歩き、地の王たちは自分たちの光栄をそこに携えて来る。」とあり、26 節に「人々は諸国民の光栄とほまれとをそこに携えて来る。」とある。地の王たちというのは全山紅葉にたとえると一本一本のもみじの木に相当し、諸国民というのは一枚一枚の葉に相当する。一人一人の人間の光栄とほまれは一人一人異なっている。他の人のものでは代用出来ない個性のあるものである。そしてこれを集めたものが国々の光栄である。そしてこれらを総合して、全宇宙の光栄が完成する。黙示録 21 章 22 節～ 26 節をもう一度読んで見る。

> 私はこの都の中には聖所を見なかった。全能者にして主なる神と小羊とがその聖所なのである。都は日や月がそれを照らす必要がない。神の栄光が都を明るくし、小羊が都のあかりだからである。諸国民は都の光の中を歩き、地の王たちは自分たちの光栄をそこに携えて来る。都の門は終日閉ざされることはない。そこには夜がないからである。人々は諸国民の光栄とほまれとをそこに携えて来る。

これが完成された宇宙即ち天国がいかなるものであるかを現した言葉である。本当にすばらしい事である。天国のすばらしさに私共は心が躍るのを覚える。人間は個性を持っており、その特徴をもって完成された宇宙を、即ち天国を飾るのである。そして他人をもって代用させることの出来ない要素となる。その人が欠けると天国が不完全になるという、そういうものをすべての人が持っているのである。それ故に人間一人は全世界よりも尊いのである。人が全世界を儲けても自分の生命を損したら何の得になろうか、というキリストのお言葉も誇張でなく、そのまま真理なのである。これは人間が人間である以上、どんな人でも、善人でも悪人でも、愚かな人でも利口な人でも、皆無限大の価値を持っているから可能なのである。一匹の迷える羊は、迷わない 99 匹の羊より尊い。その残りの 99 匹の中の一匹が迷えば、前の 99 匹よりも尊いといわれた一匹をも含めた 99 匹よりも尊いものとなる。これは人間に無限大の価値を認めて初めて言える事である。人間は皆自由意志を持ち、個性をもっており、

他の人が真似ることの出来ない特徴を持っておるからであって、どんな人でもこのような無限大の価値を持っているのである。神の御子が犠牲になっても救う価値を持っている（ロマ書 14 章 15 節）。

神は全能であられるから、もしお望みになるなら、すべての人間を、罪を犯さない、その代わり自由意志のない人間に創造なさる事もお出来になる。神にとっても後悔なさる事は、お心を痛める事である。先程のノアの洪水の前の記事でも心を痛められたとある。それ故に、人間ならばその苦しみをさけて、自由意志のないけれども罪を犯さない人間を創造するであろう。それであるのに、それを抑えて人間に自由意志を与え給うた。人間に無限大の価値を与え給うた。ここに神の本当の全能がある。人間ならば自由意志をもたない人間を創造したい欲求に負けるであろうけれど、全能の神はその欲求に打ち勝たれて、自由意志をもった人間を創造された。これは神だからお出来になったのである。自由意志のない人間は罪は犯さないが、しかし人形のような個性のないものになってしまう。それではいくら罪のない世界であっても、死んだ美しくない世界になってしまう。悔い給うように創造なさったことが、実は神だからこそお出来になったのである。それ故、一寸考えると神の全能を制限するかに見えるところの神が悔い給うということが、実は神が完全に全能で在まし給う証拠である。

この事をなお一層理解するためにキリストの場合を考えて見るとよいと思う。キリストが十字架にかかられた時に、一般庶民も大祭司や学者たちもキリストを嘲弄した。そして「ああ、神殿を打ち壊して三日のうちにたてる者よ、十字架から降りて来て自分を救え。」とか「他人を救ったが自分自身を救うことが出来ないイスラエルの王キリスト、いま十字架からおりて見るがよい、それを見たら信じよう。」などといってキリストを罵ったのである。これは人間的に考えればまことに当然の嘲弄である。人間は自分が助かる為には全力を傾注する。死力を尽くすという言葉があるが、あらゆる力を結集して助かろうとする。だからキリストに人を救う力があるなら、それをまず自分を救うために使う筈である。それが出来ないのはそのような力がない証拠である。力がないのにあると思っているのは大馬鹿か力があると見せかけている詐欺師かである。それ故、これは人間的に考えれば最も当然なる罵りの言葉である。ところがキリストは本当に自分を救う力を持っておられたのである。マタイ伝によると、ゲツセマネの祈祷の後で捕えられた時に、私が父に願って天使を十二軍団以上も今遣わして戴くことが出来ないと思うのか、と言って弟子たちを叱られたのである。御自分を救うにあり余る力を持っておられたのである。ところがそれをお用いにならないで十字架上で死なれた。これは人間には出来ない事である。神の子にして初めて出来る事である。それ故に人間的に考えて最も適切な罵りの言葉が、実はキリストを最も高く讃美する言葉であるということになる。他人を救って自分を救う事が出来ないということが、キリストが神の御子である証拠である。自分を救う力を持っておら

れるのに、それを用いないで十字架につかれたキリスト、後悔なさらないように創造なさる力をもっておられるのに、そうなさらないで悔い給うように人間を創造された神、ともに神であられるからこそお出来になったのである。ここに神が全能に在し給うことが最も確かに示されておる。悔い給うように人間を創造なされた、その事が神が本当に全能で在し給う一番大きな証拠となるのである。

このようにキリスト教の成立に都合が悪いと思われる記事が聖書に沢山ある。そしてこの事が聖書が本当のものだという証拠である。信仰がつくりごとでない証拠である。信仰が人間が勝手に造ったものであるなら、そういう都合の悪い事は書く筈がない。このように普通に考えて都合が悪い記事を堂々とのせておる聖書は偉いものである。それ故、聖書の記事の中で信仰をもつに都合が悪いと思われるものを拾って、それを基にして信仰を築きあげて行くという事は、神学的方法として面白い方法である。たとえばペトロ(14)がキリストを三度否んだという事、これは四つの福音書に出ている。十二弟子の筆頭と言われているペトロの失敗の記事を避けようとしないで、四つの福音書がみな書いている。またパウロ(15)とバルナバが第二回世界伝道旅行に出発するに当たり、大喧嘩をしたことが書いてある。もしキリスト教が真理でなく、拵え事(16)であるならば、このようなみっともない事は書かない筈である。けれど事実であるから書いておるのである。

ペトロの事を考えて見るに、ペトロは、他の弟子たちが自分たちも捕えられはしないかとエルサレムのどこかの片隅に引っこんでふるえておったのに、自分をこんなに愛して下さったイエスの最後を見届けようと、危険をおかして大祭司の屋敷に入って行った。けれど人間の弱さで、お前もあのナザレ人(17)の仲間だと言われたら、知らないと言って三度否んだのである。これはペトロの大失敗である。しかし私はこれはペトロの名誉の失敗だと思う。ペトロはキリストを愛し、キリストの最後を見届けようと思って、愛の為に危険をおかして大祭司の中庭に入って行ったのである。自分の力が及ばず失敗したけれども、イエスを愛するが故の失敗である。人間にとっては失敗よりは理想の高いことの方が大切である。失敗する位高い理想をもって、その為に最善の努力をすることの方が尊いのである。アメリカの詩人ローウェル(18)の詩の一節に

Not failure, but low aim, is crime.

という言葉がある。失敗ではなく目的の低い事が罪であるというのである。高い理想をもって、そしてそれが達成出来なくて失敗しても、それは名誉の失敗である。ペトロの場合も、このような失敗をした事はペトロにとって名誉の失敗である、と私はいつも考えておる。他の弟子のようにふるえながらエルサレムのどこかに隠れていれば、そういう失敗はしなくともすんだのである。キリストを愛する強い愛をもっておったが故の失敗であった。なお、この後でペトロは泣いたと書いてある。自分の罪に泣く

ことの出来る人は幸いである。その人を神御自身がその涙をぬぐって下さる。それ故ペトロが失敗したこと、そしてその後で心から泣いたということは、却ってペトロが人間として立派な生き方をしたことのしるしなのである。失敗はしても神に頼り縋って十字架によって赦されたことを強く経験したのである。

また、バルナバとパウロが大喧嘩をしたことも、これは確かにみっともない事である。キリスト教の最大の指導者の二人が喧嘩をした。それから別々に伝道するということになった。けれども．パウロもバルナバも本当に真理を愛しておったから、自分が正しいと思うことについては飽くまでも自分の正しい事を主張した。真理に忠実であった。友情よりも真理をとる。何よりも真理を愛するという態度を堅くとっておった。だから大喧嘩をしたわけである。「プラトンよりも真理を[19]」という諺があるが、そのように真理を愛しておったからあのような立派な信仰を持ち通すことが出来た。バルナバとパウロとの友情も却って強くなったことが聖書の記事から察せられる。内村先生も真理を何よりも愛しておった。札幌農学校を出て、開拓使御用係となって、北海道の水産の調査をした。あわび漁の調査をして、あわびの卵を顕微鏡下に発見した時には非常に喜んで涙を流された。真理を発見して涙を流して喜ばれる程、真理を愛しておった。キリスト教と真理とどちらをとるかと言えば真理をとると内村先生は言っておられた。ここに内村先生の信仰が最後まで純粋であった根拠がある。パウロもバルナバもほんとに真理を愛しておったから、その時はお互いに自分の考えが真理であると思って、友情よりも真理を重んじて大喧嘩をしたのである。喧嘩をしたことは恥であるが、これが却ってパウロやバルナバの真理を愛する心をよく現している。これらの他にも、キリスト教の信仰をもつに都合の悪いと思われることが沢山聖書にある。しかしそれらが皆、信仰の真理がほんとのものであることの確かな証拠になっておる。そしてキリスト教の信仰が真理のうちの真理であるが故に、真理を本当に求めるものは最後にはキリスト教の信仰に到らざるを得ないのである。一寸考えると理論に反する様に見える事があるけれど、理論以下ではなくて、理論以上のもので、理論で証明出来ないことを啓示[20]をもって悟らされるのである。

（「聖書の言[21]」第 449 号、1973 年 3 月）

1-2　何よりも真理を愛した人

1974年3月24日、女子学院における内村鑑三記念講演会においてのべたもの

内村鑑三という人格を一言で言い表すとすれば、何よりも真理を愛したところの一人の人間というのが一番よいと思う。

内村先生は 1881 年（明治 14 年）7 月に札幌農学校[22]を卒業し、開拓使御用掛となって水産の調査をした。その結果を発表したものの一つに「札幌県鮑魚蕃殖取調復命書並に潜水器使用規則見込上申」というのがある。これが 27 年後に「櫟林集[23]」に再録された時に次の言葉が付け加えられた。

> 内村生曰う、文は意を為さざる所多く、今より之を見て他人の作を読むの感あり、然れども余は余の今日の事業に対してかかる練習を経しを感謝す、書中載する所の鮑魚の卵子を初めて顕微鏡下に発見せし時の如き、余は歓懐措く能はず、感涙滂沱として下り、直ちに祝津村[24]の西方に聳ゆる赤岩山の嶺に登り淼淼[25]たる日本海に臨み独り万物の造主なる真の神に感謝の祈祷を捧げたりき。日本官吏[26]の上申書に聖使徒保羅の言を引きしが如き、蓋し歴史有て以来此公文書を除いて他に未だ曾て無き所なるべし、山と海とを造り給いし神は此時既に二十七年後の余の今日の小事業あるを知り給いしが如し。

真理を発見して、涙を流して喜ぶほど真理を愛したのである。これが内村先生の生涯の基調[27]であり、先生の信仰の基礎であった。先生は武士の家で成長し、武士道の良い面である、忠実、真実を重んずるように育てられた。それに加えて札幌農学校で魚類学を学び一層真理を愛するようになったのである。「余は余の今日の事業に対してかかる練習を経しを感謝す」と言って居る如く自然科学の研究をして一層真理を愛するようになったことが先生の信仰を高め、深め、最後まで信仰を純粋に保ったのである。

真理を求むるに一番の障害は自己弁護の精神である。自分に利益をもたらすものを善と考える傾向がある。自分に経済的利益を与える人の思想を真理と思い易いものである。それ故に内村先生は経済的独立ということを強調された。霊的[28]自由には経済的独立ということが必要である。真理を曲げて、自分のことをよく解釈しようとするのでなく、強い真理を愛する心をもってこの障害に打ち勝ち、真実の自己を真剣に見詰める時に、人は誰でも自分の罪に気付くのである。自分が罪人の頭なることを知る。そしてこの罪より解放されるように必死の努力をする。それ故に終には罪の赦しの十字架の福音に到らざるを得なくなる。内村先生をして我が宗教は十字架教なり

と言わしめたのは、何よりも真理を愛する先生のこの精神である。先生のこの魂の苦闘を記したのが先生の名著「求安録」である。先生の著書の中で最も多くの人を励まし慰めたのは言うまでもなく「基督信徒の慰め」であるが、「求安録」は先生の信仰の理性的根拠を示しているのであって、新約聖書におけるローマ書に相当するものと言える。

内村先生の最大の失敗は日清戦争を義戦であるとして、英文で Justification of Corean War[29]という論文を書いて世界に向かって日本の正しいことを訴えたことである。確かに当時の中国は、清朝の末期で腐敗して居り、朝鮮も悪い状態であり、これを救うのは日本の他にないと思われる事実もあった。先生があのような論文を書かれたのは無理もないと思われる。しかし先生は日本の罪を見落としたのである。日本の政治家の悪いことはよく知って居ったのであるから、知らなかったと言って弁解することは出来ない。ご自分の罪はごまかさないで、容赦なく責めたが、国家の罪となると軽く考えたのである。国際間の道徳は個人間の道徳より遅れていると言われているが、これは人間の弱点である。この点においてユダヤの預言者[30]は偉かった。国家といえども道徳を破ってはならないと言って、自分の国を責め、そのために迫害された。ユダヤに預言者が輩出したことはアルプス[31]の山々が白雪を被った嶺を空高く聳えさせているに比すべき壮観であると藤井先生[32]が言われたのも当然である。自分の為に嘘を言うことを恥ずる人でも国家の為に嘘をいうことは良いことだと考える。しかし秘密にしなければ、嘘を言わなけれは国益を護れないような国家、CIA[33]のようなものがなければ存続出来ないような国家は亡びた方がよい。昔から沢山の強大な国家が亡びた。国家といえども罪を犯してはならないのである。自国の罪を責めたユダヤの預言者は最大の愛国者である。後には先生も信仰によって潔められた真の愛国者になられたが、その時にはこの人間の通弊[34]に乗せられて、つい日本の悪を見落とされたのである。

ところが内村先生は戦争が終わって見ると、この戦争も日本の欲のための戦争であった事実に気付き、義戦としたことを後悔し、真の平和主義者になった。これはまた普通には出来難いことである。内村先生の何よりも真理を愛する心がそうさせたのである。

共産主義[35]は元来よいものである。平等にしよう、世の中をよくしようというのであるから人々から喜ばれてよい筈である。それにも拘らず世界の人間の半分から嫌われておる。それは暴力を使うからである。武力革命ということを大切な理論としているからである。ところが、日本共産党はこのことに気付いて、武力革命の理論をお預けにして議会主義によることにした。そうしたら非常に躍進した。これは武力革命の理論が誤っていることを示す事実である。そしてこういう事実が示されてもなお日本共産党は武力革命の理論を捨てられないでいる。これは罪深き人間にとって誤

りを捨てて、真理につくことが如何に困難であるかを示す事実である。真理と自由を愛すると自認している革新陣営の人々にもこのことが出来ないのである。これを見ても内村先生が日清戦争の義を唱えるという失敗はしたがその非を悟って、伝統に縛られないで非戦論という真理に立ったことは非常に偉いことである。先生にこのことをさせたのは先生の信仰である。キリスト教の信仰によって一層強く真理を愛するようになり、真理を愛するが故に一層深くキリストを信ずるようになった。信仰と真理とが互いに働き合って最も高き、深き信仰と真理に到らしめるのである。

コリント後書 3 章 14 節以下に「実際、彼ら（ユダヤ人）の思いは鈍くなっていた。今日に至るまで、彼らが古い契約を朗読する場合、その同じおおいが取り去られないままで残っている。それは、キリストにあってはじめて取り除かれるのである。今日に至るもなお、モーセの書が朗読されるたびに、おおいが彼らの心にかかっている。しかし主に向く時には、そのおおいは取り除かれる。」とある。キリストを信じて、人は初めて伝統に縛られないで自由に真理を求めることが出来るのである。旧約聖書の精神をそのまま発展させれば、新約の信仰に至らざるを得ないのに、ユダヤ人にそれを信ずることが出来ないのは伝統に縛られていて自由に考えることが出来ないからである。おおいが彼らの心にかかっているから真理が見えない。この顔おおいを取り除くものはキリストを信ずる信仰であるとパウロは言っているのである。キリストもヨハネ伝 8 章 31 節、32 節で「もし私の言葉のうちにとどまっておるなら、あなたがたは、ほんとうに私の弟子なのである。また真理を知るであろう。そして真理は、あなたがたに自由を得させるであろう。」とおっしゃっておられる。大きな問題について、誤りを改めて、真理に就くということは、キリストを信ずる信仰がなければ、ほとんど不可能であると言っても過言ではないと思われる。今日の信仰抜きの学問が金儲け主義に堕落している事実がこのことを示している。

内村先生の仕事で一番偉いことは真理としてのキリスト教の確立ということである。キリスト教は真理なるが故に信ずるのである。真理を求めるならば最後にはキリスト教に至らざるを得ないことを先生は生涯をもって実証なさった。真理とキリスト教と、どちらを取るかと言えば真理をとるという信仰である。罪の赦しの十字架の福音は宇宙最大の真理である。学問の極致、真理の極致である。真理であるが故に不滅である。これを護るに教会組織も要らない。儀式が宗教には不可欠のように考えられているが、キリスト教の信仰には儀式は要らない。キリストは「神は霊であるから、礼拝する者も、霊とまこととをもって礼拝すべきである。」とおっしゃった。また「私は道であり真理であり、命である。だれでも私によらないでは、父のみもとに行くことは出来ない。」ともおっしゃった。キリスト教は元来こういうものであった。それがローマの国教となり、ローマ帝国[36]の保護を受けるようになったら堕落して形式主義になり、荘厳な儀式を行い強固な教会組織が出来たが、信仰は衰えて中世

の暗黒時代[37]になってしまった。それをルター[38]が宗教改革によって、もとの霊的宗教に引き戻したので、真理と自由の貴ばれる近代が出現したのである。しかし、ルターは洗礼[39]と聖餐[40]と教会組織を残してしまった。この僅かに残った形式主義のためにキリスト教が無力になってしまい、戦争を止めさせることも出来ず、唯物論[41]の攻勢に負けそうになっている。これを内村先生が全く形式主義のない、もとの形に引き戻したのである。真理なるキリスト教を確立なさったのである。ルターの出来なかったことをなしたのである。といってルターより内村先生の方が偉いというのではない。ルターは千年の伝統に縛られている中世のヨーロッパで行い、内村先生は縛られる伝統のない日本で、自由と真理の貴ばれる現代でなしたのであるから、ルターよりも遙かに容易であった。しかし、なさったことはルターよりも偉いことである。時がたつに従って、世界は内村先生の仕事の意義を悟るであろう。儀式のない、組織のない真理なるキリスト教が確立されたのである。

新約聖書の供するもう一つの大きな真理は、人間というものは無限大の価値を持っているということである。キリストの有名なお言葉「人が全世界をもうけても、自分の命を損したら何の得になろうか。」が示す通りである。従って人間一人一人は他の人と比較できないものである。それ故一人一人が罪人の頭である。最大の罪人である。また一人の人を救う為に神の子を犠牲にしても救う値打ちを持っているものである。ロマ書 14 章とコリント前書 8 章 11 節に「この弱い兄弟のためにもキリストは死なれたのである。」とある。天才とか偉人とかいうような人間的価値も、人間であるという無限大の価値に較べれば取るに足りない。信仰の偉人をアルプスの嶺に例えたが、地球の半径は約 6,000km であるから、その 100 万分の 1 の 6m の球だと考えると 10km の上空と言ってもその 100 万分の 1 で 10mm である。半径 3m の円で表すと 5mm の幅の線の中に入ってしまう。8,000m の高峰といっても、細い線の中に入ってしまう。それ故人間的な偉さ等は神から与えられた無限の値打ちに較べれば取るに足りないもので、人間は皆平等である。それ故内村先生は平民が好きであり、凡人であることに誇りを持っておられた。

内村先生はレンブラント[42]を好まれた。新年に四人の偉い人の肖像を書斎に飾ったことを書いた「新年の珍客」[43]という文章で、レンブラントのことを述べて、

> 彼は画界におけるカルビン[44]と称せられしものであって、新教[45]思想を筆と色とに現した者である。彼はオレンジ公ウイリアム[46]、クロムウェル[47]、ワシントン[48]等に劣らない平民主義の主導者である。彼は好んで商人、職工等、所謂下層の民と称せられたる者を画いた。彼は勿論、彼の霊魂の救主イエス・キリストを画いた。彼は今の平民主義者のように神を無視し、キリストを嘲るような者ではなかった。彼は平民主義をその根本において理解した者である。

彼の理想の平民は言うまでもなくナザレの大工イエスである。彼はこの人を神の子として拝した。故に自身が平民の画家となったのである。

と言っている。先生は最後まで平民であることを失わなかったグラッドストン[49]を愛された。その葬式の様子を紹介する文章[50]の中で、その葬列を述べて「残余は彼の親友、親僕、石炭掘り、日傭人、……ありとあらゆる平民の代表者なりき。前半列を以て判ずれば帝王の葬式の如く、その後半列に依りて推測すれば村老の葬礼かと疑わる。」と述べておる。

「後世への最大遺物」[51]は偉い本であるが、その中でも一番偉いことは、金も、事業も、思想もよい遺物であるが最大の遺物と言えない。それは誰でも遺すことが出来るものではないからだと言って、誰でも残すことの出来る勇ましい、高尚な生涯が最大遺物であると言っていることである。平凡なものが貴いのである。近頃よく人が言うエリートという言葉位卑しい、いやな言葉はない。自分を偉いものとし、人を押しのけて自分だけ得をしようという欲張り根性である。その為に日本人が卑しくなりエリートコースを進みたいというので競争が烈しくなり、日本の今日の教育の崩壊を来たした原因となっている。日本語で言えば封建的でみっともないので、片仮名の外国語で言ってごまかしているのである。

内村先生は、天才、偉人として祭り上げられることを嫌っておられた。先生はカーライル[52]が大変好きであった。カーライルの著書によって啓発されたのであるが、カーライルの著書の中で「英雄崇拝論」だけはよくない本だと言っておられた。人物崇拝というのはよいようでよくないことである。先生がなくなる前の年に先生を非常に崇拝しておった方が「先生は世界的偉人だから、そんなことをなさってはいけません。こうすべきです。」と申し出たことがあった。先生は大変怒られた。その頃の日記に、世界的偉人に指図するのだからその人は超世界的偉人だという意味のことを書かれた。偉人崇拝というのは本当にその人を崇拝するのでなく、自分の中に勝手に作ったその偉人のイメージ(image)を崇拝するのであるから、実は自分を崇拝しているのである。崇拝される人こそいい迷惑である。

内村先生がリンカーン[53]の言葉だといってよく紹介された話がある。「神さまは凡人をお好きに違いない、それだからこんなに凡人を沢山お造りなさったのだ[54]。」というのである。いかにもリンカーンらしい、言葉である。神は全能で在し給うから、人間を全部偉人や天才にお造りになることもお出来になる。偉人や天才を稀にしかお造りにならないのは、偉人や天才をお好きでないからであろうというのは深いことを教えている。アインシュタイン[55]やナポレオン[56]のような偉人は出来損ないで私達のような凡人が神の会心の作である。

コリント後書 4 章 7 節に「しかし私たちはこの宝を土の器の中に持っている。その

測り知れない力は神のものであって、私たちから出たものでないことがあらわれる為である。」とある。神は内村先生が偉いからあのような偉い仕事を先生におさせになったのではなく、内村先生が真理を何よりも愛されて、事実をよく見て、いくら偉いことをしても、それを自分の力でしたと見誤(あやま)ったりしないことをよく知って居(お)られたので、あのような偉いことをする力を与え給(たも)うたのである。内村先生はご自分の背の高さ程の書物を書かれて、神の為に働かれたが、「このために天国に行けるのではない、キリストの十字架によるのだ。」と常に言われておった。

私共は内村先生を偉人(いじん)として天才として祭り上げてはならない。それは先生が最も嫌ったことである。内村先生のように強く真理を愛するものとなって、真理の極致(きょくち)なる罪の赦(ゆる)しの十字架の福音(ふくいん)を信ずることができるように一生懸命にならなければならない。これが内村先生を記念する一番大切なことである。

（「聖書の日本」[57]第 454 号、1974 年 5 月）

1-3　平民内村鑑三

1976年4月25日、内村鑑三記念講演会（新潟労働衛生会館）においてのべたもの

内村先生の文章に「平民と平信者」[58]というのがございます。1906 年 3 月に発表されたのであります。それを読んで見ます。

> 余は貴族ではない。平民である。余は特別に陛下[59]に寵遇[60]せられんと欲するものではない。唯忠実なる一臣民[61]としてその統治を受けんと欲するものである。その如く余は使徒でもなければ亦法王、監督でもない。然り、世にいう牧師、伝道師でもない。余は平信者である。特別に衆人[62]をこえて神に愛せられんと欲するものではない。余は唯神が公平に万人を愛したもう其の愛をもって彼に愛せられんと欲するものである。余は社交的には貴族たることを欲せざるがごとく、また信仰的にも僧侶、神官、祭司、教職たることを欲しない。余は国民としては平民、キリスト信者としては平信者として存在せんことを欲する者である。

こう述べられております。

内村先生は平民たることに徹せられた方であります。国民として平民たることに徹せられたばかりでなく、キリスト信徒としても平信者たることに徹せられたのであります。世俗的な特権をすてることは、高い信仰的なものを与えられたものにとって、比較的容易なことでありますが、信仰的なる特権をすてることは困難であると思います。それを内村先生はすてられたのであります。武士という特権階級の家に生まれ、武士としての教育を受けた内村先生にとっては世俗的特権をすてることも困難であったろうと思われます。しかし信仰によって万人が平等につくられたことを知り、なおその上に自分の罪を知り、自分こそ罪人のかしらなること、すなわち最も卑しい人間であることを知り、その者がキリストの十字架によって救われたことを知ったので、平民であることに満足と喜びを持つようになられたのであります。したがって、先生は平民を好きでありました。

「新年の珍客」という先生の文章がございます。1907 年の 1 月に発表されたものでありまして、新年には珍しい客がよくくるのでありますが、四人の偉い人の肖像を書斎に新たに飾りまして、これを珍客になぞらえて「新年の珍客」という文を書かれたのであります。はじめにレンブラントのことを述べて、次の如く言って居ります。

> 珍客の一人はオランダ人として紀元 1608 年に生れたる画家レンブラントで

> ある。彼は画界におけるカルビンと称せられし者であって、新教思想を筆と色とにあらわした者である。彼はオレンジ公ウイリヤム、コロムウエル[63]、ワシントン等に劣らない平民主義の主導者である。彼は好んで商人、職工等いわゆる下層の民と称せられる者を描いた。彼は勿論、彼の霊魂の救い主イエス・キリストを描いた。彼は今の平民主義者のように神を無視し、キリストを嘲るような者でなかった。彼は平民主義をその根本において解したものである。彼の理想の平民はいうまでもなくナザレの大工イエスである。彼はこの人を神として拝した。故に自身が平民の画家となったのである。

また先生はヴィクトリア女王[64]の機嫌を損じてまでも、最後まで平民たることを守り通したグラッドストンを大変愛されました。先生の文章に「グラッドストンの死状と葬式」があります。これは 1898 年 7 月、グラッドストンが死んだ直後に書かれた文章でありますが、最後に葬式の行列のことが述べてあって、

> 行列の前半には英国の権威と知識と道徳の代表者がならび、後半部は彼の親友、親僕、石炭ほり、日傭人、馭者、馬丁、工夫、園丁、ありとあらゆる平民の代表者なりき。前半列によって判ずれば帝王の葬式のごとく、後半列によって推測すれば或は村老の葬礼かと疑わる。平民は彼によりて高く、貴族は彼によりて低し。

とこう言っておられます。

このように内村先生は平民を愛し、御自身平民であることに大いなる満足と喜びを持っておられたのであります。そしてこれはキリスト教の信仰の結果であり、レンブラントについて、彼の理想の平民はナザレの大工イエスである、と言っております。ピリピ人への手紙の 2 章に、

> キリストは神のかたちであられたが、神と等しくあることを固守すべき事とは思わず、かえって、おのれをむなしうして僕のかたちをとり、人間の姿になられた。その有様は人と異ならず、おのれを低くして、死に至るまで、しかも十字架の死に至るまで従順であられた。[65]

とありますが、人間の中で最も謙虚になられたナザレのイエスを救い主として拝する者は最も低い平民たることに喜びと誇りを感ずるはずであります。内村先生が特権階級たる武士の家で教育されたにもかかわらず、平民たることに誇りを感ずるようになられたのはこの十字架の信仰によるのであります。

人間の価値は無限大であります。さきほど辻先生が、私が申しあげたいと思うことを沢山言って下さいましたから簡単に申しあげますが、「人が全世界をもうけても自分の命を損したらなんの得があろうか。」ということは聖書に書いてあるえらい言葉の一つであります。また 100 匹の羊の譬えでも同じことを教えております。これは私共を大変慰めてくれる譬え話でありますが、各々の羊が無限の価値を持っているとしてはじめて理解される真理であります。これを数学的に正確に考えて見ますと、迷える 1 匹の羊は残る 99 匹より尊いということは、残りの 99 匹のうちの 1 匹が迷えば、またその羊は他の 99 匹より尊いということになり、その 99 匹の中には前の 99 匹よりも尊いと言われた羊も入っているので、一番大きいものよりも大きいという矛盾に陥り、これは有限なものであるならば不可能なことであります。しかし無限大なら可能になります。無限大というものは、こういう常識を破った不思議な性質を持っておるものであります。そういうことを研究いたしますのは数学の中の集合論という学問でありまして集合論はドイツのハルレ大学[66]の教授のゲオルク・カントル[67]という人が、1879 年、丁度今から 100 年前に発表したものであります。カントルはその結果があまりにも当時の数学の常識とかけ離れておりましたので、研究の発表を十年間も躊躇しておったのであります。（この無限大の不思議な性質については本書 2-3「科学の本質と信仰」の集合論の項を参照して下さい。）

罪人が一人でも悔い改めるなら、悔い改めを必要としない 99 人のためにもまさる大きな喜びが天にあるであろう、という事が人間の価値が無限大であるならば理解出来る言葉であります。人間はそういう無限の価値を持っておりますから、それに多少の普通の人間的な価値と思われるものをつけ加えてもとるに足らないものでありまして、皆平等ということになるのであります。そういう風に人間は誰でも無限の価値を持っている、人が全世界をもうけても自分の命を損したら何の得になろうかというキリストの言葉によって、先程の辻先生のお話のように障害児でもなんでも無限の価値を持っているのだから、人間としての立派な生活が出来るようにしてあげるというので障害児の教育ということが非常に意味を持ってくるのであります。辻先生のお話では障害児も健常児[68]と同じように負けずに何でも出来るんだというお話が沢山ありましたけれども、健常者に負けないどころではない、障害児の方がいい事があるのですね。私の学校の卒業生が関西の知的障害児[69]の施設で働いておりまして、知的障害児の施設で働く事が楽しくて嬉しくて仕様がないといって休みに帰ってくるたびに話をしてくれるのであります。関西の方では知的障害児の事を「あほう」といいます。彼の話でありますが、町を子供達を連れて歩きますと健常者の子が「あほうが通る。」といってばかにする。そうしましたら、知的障害児の方が「あほう、あほうなんて、いう人の方があほうや」と面白い事を言ったと、非常に喜んで話してくれました。知的障害児の方が、人のことを見下げて「あほう。」なんて言ってはいけないんだとい

う事を知っている。優れた知能を持った人はそういう事を知らないで馬鹿にしてはならないのに馬鹿にする。ですから知的障害児の方が本当に劣ったものではないという事がよく分かるのであります。先程のお話で、一寸私は不満に感じたのですが、それは先生が知的障害児や障害者を小さい者とおっしゃるのをこれはよくないのではないか、知的障害児の方がかえっていいところがあるのではないかと思いましたけれども、実はやはり辻先生のおっしゃった通りでよろしいのでありまして、それは人間という者は自分が小さい者だという事が分からなければ何も出来ない者だからです。

学問のはじまりはソクラテス[70]であります。ソクラテスは自分が愚かという事が分からなければ本当の学問は出来ない、という事を教えた。それをプラトン[71]がなお発展させ、なおアリストテレス[72]が発展させまして今日の学問の基礎が出来たのであります。ですから辻先生のおっしゃる通りでいいのです。小さき者という事を自覚しなければ人間は学問も何も出来ない。人間という者は自分の罪を悟らなければ、信仰が持てない、立派な生活が出来ないと同じ事であります。

なおそれに続けて申しますけれども、無限大の価値のある者は責任も無限大であります。罪人である人間は無限大なる罪人であります。従って、各人が罪人の頭であります。罪人の頭という事はテモテ第一の手紙の 1 章の 15 節にある言葉でありますけれども、パウロは自分はその罪人の頭だ、自分は最大の罪人だと言っておるのであります。これも人間の価値が有限であるならば、パウロが第一の罪人、最大の罪人であるならば、他の人は第二か第三の罪人という事になる。けれども人間の価値は無限大でありますから、誰でもが皆第一の罪人であり、罪人の頭であります。他の人と比較する事の出来ないものです。

ロマ書 14 章 12 節に、「だから私たちひとりびとりは、神に対して自分の言いひらきをすべきである。」[73]とあります。自分一人で神の前に言いひらきをしなくてはならない、他の人に一緒に来てもらって弁明して貰うとか、あるいは他の人より罪が小さいとかそういう事が言えるものではない。無限の価値を持っておりますから責任も無限大でありまして、各人が罪人の頭であります。決してパウロは誇張して罪人の頭だと言っているのではなくて、本当に自分は罪人の頭だと思っておるのであります。そして誰でも無限の価値を持った人間であるならば、罪人の頭であります。無限の価値を持ったものとして、罪人の頭として人は皆平等であります。

近頃の人のよくいうエリートという言葉、エリート意識をもて、とかエリート・コースを進むとかいいますが、私はこれくらい卑しい卑劣な考えはないし、言葉はないと思っております。普通の日本語で言うと、みっともないし、恥ずかしいからそれでフランス語を使うのでありますけれども、自分さえよければよい、自分さえ金を儲ければよい、そういう考えです。自分は他の人より少しでも金を儲けたい、自分がよくなりたい、そういう風に考えているのでありますから、私はエリートという言葉は一番

封建的な卑しい言葉だと思っております。このために日本の国がどれ位悪くなってきたかはかりしれないのであります。今日、受験教育のために教育が崩壊しておりまして、社会が非常に悪くなってきております。皆がエリート意識を持とう、人よりも上になろう、余計に金を儲けようと考えているからこうなってしまいました。競争心によって人に負けないように勉強すると言いますけれども、競争心では本当の勉強は出来ない。学問の貴さ、面白さが分かって、そして一生懸命勉強してはじめて本当の勉強が出来るのであります。偉い先生方が、学問・教育の事が分からないで、ああでもない、こうでもないと教育制度をかきまわしておるので、教育が益々悪くなります。例を申しますと、詰め込み教育をさせないために授業時間数をへらすということになりました。つまり、詰め込み教育の時間を少なくして、詰め込み教育の害を少なくしようというのでしょう。ですから 10 分ずつ休みを多くして時間をへらすのだけれども、短くした時間の中で詰め込み教育をしようという訳です。これが詰め込み教育の害をなくす事にならないという事が偉い先生方には分からない。要するにエリート・コースを進みたいというのは言いかえれば人より余計に金儲けをしたい、金儲けではない名声を求めるのだ、権力を求めるのだと言いますけれども、名声を求めるのも、権力を求めるのも金儲けと同じ事であります。学問も教育も金儲けのために使うので、今日の社会の混乱が起こったのであります。平民たる事を嫌い、平民より一寸でも上になりたいと思うものだから社会の混乱が起こりました。

戦後、日本では勲章とか栄誉とか、そういう事を止めましたけれども、今、また復活いたしました。皆が勲章をもらって人よりも偉くなりたいと思うから、ああいう事を始めるのですね。どうしても平民たることを喜ぶようにならなければいけない。真に平民たることを喜ぶようにしてくれるものはキリスト教より他にありません。平民たることを喜ぶキリスト教の信仰がないからエリートになりたがるのであります。平民たる事に徹する事がいかに大切であるかという事が分かります。内村先生は世俗的に平民となられたのでありますが信仰的にも平信徒である事を喜ばれているのであります。それが単に僧職につかないという意味ではないのであります。僧職というのは形はどうあっても世俗的のものであります。むしろ信仰につながりがあると思って信仰的な形式に捉われて、自分が信仰から離れた事に気がつかない、かえって悪くなることが多いのであります。僧職のような階級制度のはっきりしたものでなくても、牧師、伝道師でも職業的になると世俗化して、世俗的特権階級とかわらなくなるものであります。内村先生は世俗的特権階級とならない事と同じ意味で僧職につく事を嫌われたのです。ですから「しかり、世にいう牧師、伝道師でもない、余は特別に衆人を越えて神に愛せられんと欲するものではない、余はただ神が公平に万民を愛したもうその愛をもって神に愛せられんと欲するものである。」と、そう言っておられるのです。

神の愛は誰をもその無限の愛をもって愛していたもうのであります。特定の人を多く愛し給(たも)うという事はあり得ないのであります。私共はよく、誰それは特別に神に愛されている方だと言いますが、それは一見非常に苦難の中にある方が実は神の愛の中におる事が分かったという時に言うのでありまして、特別に神に愛されるという事はないのであります。神は誰をも同じようにその無限の愛をもって愛されておるのであります。神はかたより見たまわない、という事が聖書にたびたび出てまいります。実はこういう事が分かって、神は無限の愛を持って私たちを愛して下さる事が分かって、自分のような罪人(つみびと)でも神は愛して下さる、という事が信じられるのであります。ほんとに安心出来るのであります。ですから信仰についての欲張りはよくないのであります。特別に衆人(しゅうじん)に越えて神に愛せられんと欲するのは罪であります。誰でも同じように神に愛されているのでありますから、愛の結果であると思われる霊的賜物(たまもの)についても平等であります。誰でも無限の愛を受けているのですから、誰でもこれ以上受けられないという恵みを受けているのであります。そういう事を分かっていただきたいために、私個人の事を言う事を許していただきたいのであります。

私は今 76 才と 5 ヶ月でございます。内村先生は 69 才 1 か月、数えで 70 才の年の誕生の月、3 月に亡くなられたのであります。ですから私は年齢については 7 年 4 ヶ月内村先生より偉くなっております。内村先生は偉い仕事をなさった、しかし私は年こそ偉くなったけれども、天国にいって内村先生にあうとき、仕事らしい仕事は何もしていない、実をいうと合わせる顔がないわけであります。けれども聖書はこういう事を教えてくれています。コリント人(びと)への手紙 4 章 7 節に「しかしわたしたちは、この宝を土の器の中に持っている。」とあります。私達の持っている信仰は実にすばらしいものであります。この世のどんな学問や技術にくらべてもすばらしい、偉いものであります。ところがその宝ものを持っている入れものである私達は土の器であり、つまらないものなのです。神様はすばらしい信仰を入れるにふさわしい器にその偉い信仰を与えたらいいだろうと思うのに、神様は本当に土の器のような私に信仰を与えて下さった。すばらしい信仰を入れるにふさわしい器に私を作って下さったらどんなによかっただろうと、つくづく土の器の嘆(なげ)きを発せざるを得ないのであります。しかし聖書はなお教えております。その次のところですが、「その測り知れない力は神のものであって、わたしたちから出たものではないことがあらわれるためである。」とあります。私がもし内村先生のような偉い仕事をいたしますならば、こんな偉い仕事をする力が自分にあったんだと思い違いをしやすい、そして高慢(こうまん)になって自分が罪人(つみびと)である事を忘れて、主(しゅ)の十字架にすがる事を忘れてしまって信仰から脱落してしまう恐れがあります。ですから私には丁度(ちょうど)よい土の器に作って下さって、こんな偉い仕事が出来た、自分の力でしたと思う心配のない丁度(ちょうど)よいあんばいの仕事をさせて下さった。私としては丁度(ちょうど)よい恩恵(おんけい)が与えられている。もしこれ以上私が恩恵(おんけい)を受けたなら

ば堕落するかも知れない。最大限の恩恵、私がこれ以上受けられないという、そういう最大限の恩恵を神様は私に与えて下さっておるのです。

マラキ書に「わたしの宮に食物のあるように、十分の一全部をわたしの倉に携えてきなさい。これをもってわたしを試み、わたしが天の窓を開いて、あふるる恵みをあなたがたに注ぐか否かを見なさいと、万軍の主は言われる。」（3 章 10 節）とあります。神様は私達にあふれるばかりの恩恵をそそいで下さろうとしています。ただ私達は入れものが小さいために、じきにあふれてしまうから沢山の恩恵を受ける事ができないのであります。内村先生はあれだけの仕事をなさっても、これは自分がしたのではない、神様が先生を通してなさり給うたのだという事を見失う事がないので、それで神様は内村先生にあの様な偉い仕事をさせたもうたのであります。先生は御自分の背の高さほどの本を書いて神様のために働かれましたけれども「これで救われるのではない、キリストの十字架によるのだよ。」という事をいつも言っておられました。ですから先生にはあんな大きな御仕事をさせて下さったのです。偉い先生には先生の受けうる最大の御恩恵を与えられ、私には私の受けうる最大の恩恵をそそいで下さっているのであります。

私も内村先生と同じように神様に愛されているのであります。ですから内村先生は特別に衆人に越えて神に愛されんとなさらないはずであります。十字架によって救って下さるというのは無限大の愛であります。それにくらべれば、偉い仕事をさずけて下さるという事は比較出来ないほど小さな事です。ロマ書 3 章 22 節には「それはイエス・キリストを信じる信仰による神の義であって、すべて信じる人に与えられるものである。そこにはなんらの差別もない。」本当に十字架によって救って下さるという事についてはそこになんらの差別もない。ですから万人が公平に神に愛されているのであります。私共は内村先生と共に、公平に神に愛せられんと欲すること信者たる事それ自体に誇りと喜びを見出すものであります。その事を思い起こすことが内村先生の最大の記念であると思って述べた次第であります。

なお、もう少し時間を借りて説明したいと思うのですが、無教会の人々の信仰は確かにすばらしいけれども、しかしこれは余程理性のすぐれた人でなければ信じられないもの、そういう風に考える向きが多いのであります。そしてまた、矢内原先生[74]とか、南原先生[75]のような、東大総長をなさった方が無教会の信仰を持っておられるのでありますから、世間はそう思いやすいと思うのでありますけれども、決してそうではないのです。本当に万人は平等でありまして、誰でも同じように最高の信仰を持つことができるのであります。誰でも神に頼って立派な信仰を持つ事が出来るというのが内村先生の教えであります。

北海道の函館の東の方に床やさんがおりました。この床やさんはただ「聖書之研究」という雑誌をとって、自分一人でもって信仰をもって生涯を終えられた平林徳蔵と

いう人であります。この方が 1924 年（大正 13 年）に亡くなられました。亡くなられました時にお寺の坊さんが当然お葬式は仏教でしなくてはいけない、という事を言いましたら、村の人があの平林徳蔵さんはキリスト信徒として村のために尽くしてくれた、だから当然キリスト教でお葬式をするべきで、和尚さんがもし仏教でしなければいけないというのだったら、和尚さんにこの村から去ってもらう、という事を言い出したものですから、キリスト教でする事になった。しかしどうしてキリスト教の葬式をするか分からないものですから、函館から牧師さんを呼んできまして、キリスト教の葬式をしたのだそうです。

翌 1925 年（大正 14 年）に、内村先生は函館の時任という家の結婚式に出られました。そこでこの平林徳蔵さんの式をした牧師さんからこの話を聞かされて、内村先生は大変喜ばれました。さっそく帰ってからしらべてみましたら、亡くなった月をもって「聖書之研究」の購読をやめておるのが分かりました。そこで内村先生は 1925 年（大正 14 年）の 8 月号の「聖書之研究」巻頭言に、英文と日本文の両方でこの話を書きました[76]。巻頭言に書くなどという事はいかに内村先生が喜ばれたかという事を示すものであります。私は内村先生の晩年に内村先生に親しく接し福音を教えられましたけれども、そういう密接な関係にあるとかえって本当の信仰を持つ事は出来ないのではないか、平林徳蔵さんのように内村先生に会った事もない、「聖書之研究」だけで教えられた人の方がかえって本当の信仰を持ったのではないかと思います。

私も古武井村[77]に行ってみたいと思っておりました。内村先生の文に亀田郡古武井村と書いてあります。けれど地図をさがしても古武井村がないものですから分からないでおりましたが、一昨々年、私が北海道へ参りました時に古武井村を見つけまして、そこをたずね、床やさんの家の跡を見てきました。そしてお孫さんが函館に住んでおられるということを聞きましたので、函館に寄って平林さんのお話を聞きたいと思ったのですけれども時間がなくて出来ませんでした。一昨年、また北海道へ行きました時に函館に寄りまして、お孫さんに当たる方に会っていろいろお話を聞きました。お家の方には信仰は伝わらなかったのですけれども、「徳蔵さんは立派な人だ。そして何よりも本を非常によく読んでいた。」という事を言っておられました。キリスト信徒は本を読みます。今の大学生は本をあまり読まないでマンガばかり見ているようですね。本をよく読みますから、ほんとの教養を身につけて居られて、「聖書之研究」だけで神様に頼って立派な信仰を持ったのです。どんな学歴のない、田舎の人でも、今日の高い教育を受けた偉い人と同じ様に信仰をちゃんと持つ事が出来るという証拠を私は見てきました。

内村先生にはそういう友人が沢山おられたのであります。そしてこれらの方々が、万人は平等であり誰でも、どんなに学歴のない人でも神によりすがって、立派な信仰の生涯を全うすることが出来ることを実証して参りました。人であることによって、

神の最大の恩恵(おんけい)を受けるのですから、平民であることに最大の喜びと満足を感ずるのであります。

1-4　純粋なる福音

1977年3月27日（日）、大阪YMCA講堂における内村鑑三記念講演会においてのべたもの

> イエスは女に言われた、「女よ、わたしの言うことを信じなさい。あなたがたが、この山でもまたエルサレムでもない所で、父を礼拝する時が来る。あなたがたは自分の知らないものを拝んでいるが、わたしたちは知っているかたを礼拝している。救はユダヤ人から来るからである。しかし、まことの礼拝をする者たちが、霊とまことをもって父を礼拝する時が来る。そうだ、今きている。父は、このような礼拝をする者たちを求めておられるからである。神は霊であるから礼拝をする者も霊とまことをもって礼拝すべきである。」
> （ヨハネ伝 4 章 21 節～ 24 節）

内村先生の信仰を純福音と言って居った。キリスト教を一口で言えば、罪の赦しの十字架の福音である。この福音は真理である。真理であるから信ずるのである。真理とキリスト教と、どちらをとるかと言えば真理をとる。真理でないことが確かになればキリスト教の信仰を捨てるというのである。この福音に真理でないものがくっつくことがある。余計なもののないものが純粋なる福音である。これが内村先生の信仰である。

真理に達するに二つの道がある。一つは理論による道であり、他は啓示による道である。カント[78]の言い方によれば理論理性と実践理性である。理論ばかりでも高い真理に到達し得ない。理論の進め方に誤りが入りやすい。その上に理論に限界がある。信仰や道徳の問題は理論では解明出来ない。不合理なるが故に信ずという語があるが、理論に反するからというのでなく、理論に限界があることを言うのである。啓示によって高い真理が示されるが、啓示は普遍的[79]ではない。それ故に神からの啓示か悪霊からの啓示かわからないことがあり、迷信に陥るおそれがある。それ故に理論と啓示と援け合っていって、検討し合って、誤りをまぬがれてほんとに真理を求めることが出来るのである。聖書はこのことを御霊と知恵といっている。使徒行伝 6 章のステファノ等七人の奉仕者を選んだ時に御霊と知恵とに満ちた人をといって選んだ。また、ステファノが人々と議論したが彼は知恵と御霊とで語っていたので、これに対抗出来なかったとある。御霊と知恵と協力して人は最高の真理に達することが出来る。御霊と知恵とを働かせて、非真理を見出してそれを除いていって福音の純粋をまもることが出来るのである。

まず十字架の福音がキリスト教の中心の真理であることを啓示と理論によって明らかにする。沢山の宗教がある。何々教に入れば救われるとか、何々教のこれこれの儀

式を行えば救われるとか言われているが、そしてこれは啓示によったのであろうが誤りである。それには何の証拠もなく、証明もない。近頃は大学入試合格の為に神社へお参りするということであるが、百人定員の大学への入学志願者が、ある神社へ二百人も三百人もお参りしたら、その神社の神はどうするであろうか。その大学の定員を増員させることが出来るのか。このように理論を進めてみるとお参りするという儀式では人は救われないことは明らかである。儀式は気休めにすぎない。気分とか情操[80]とかにひたるに過ぎない。宗教的情操を信仰と考え違いをしているのである。儀式的宗教はすべて原始的な御利益宗教である。それ故真の宗教は倫理宗教にならざるを得ない。道徳的に正しくなれば救われるというのである。これならば誰にも理解できる。仏教もこの点では一歩進んだ宗教である。善根を積んで極楽往生を遂げることが出来ると教える。旧約の信仰も同じであり、道徳即ち律法[81]を守れば救って下さるというのが、神と人との間の約束である。それで新約に対して旧約というのである。ところが道徳を完全に守ることは不可能である。人は罪の奴隷である。それ故人間以上のものが来て人間を罪から救ってくれなければならないといって救い主待望ということが旧約聖書を一貫している精神である。この待望に応じて今より二千年前にキリスト即ち救い主が地上にお出でになったのである。キリストを信ずれば救われるというのが新約である。仏教も進歩して、道徳を守ることは煩悩に妨げられて出来ないから、阿弥陀様の慈悲によって救われるという教えにまで発展した。法然[82]、親鸞[83]の浄土宗[84]的信仰が日本に起こったことは偉いことである。もう一歩でキリスト教の信仰に達し得る。何が足りないかと言えば阿弥陀様の慈悲だけがあって、義がない。義のない愛は愛ではない。お婆さんが孫を愛して、甘やかして、意気地なしの人間にしてしまっては、愛ではないことは明らかである。義しくなるように導くのが真の愛である。ただ罪を赦したのでは神の義が成り立たない。神の子の十字架の犠牲が必要である。それ故罪の赦しの十字架の福音が最高の真理である。

これに対し種々の真理でないものが附着する。第一の不純物は儀式である。儀式は宗教の大切な要素であると考えられている。キリスト教以外の宗教は皆儀式に捉われている。儀式即宗教といってよい。儀式に列席して救われた気分になることが信仰だと思い違いをしている。内村先生の文章に「新約聖書の供する二大真理」(所感 1908 年 9 月)[85]というのがある。その中に

> 其第二は是なり、即ち、宇宙広しと雖も其中に正義の代用をなすに足るの儀式あるなし、神に納けられんと欲せば割礼[86]も無益なり、水の洗礼も無益なり、麺麭と葡萄酒とを以てする聖餐式も無益なり、神の霊は如何なる礼式に列するも降らず、神は又何等の外形的儀式を設けて之を人に強うることなし、彼の前に貴き者は砕けたる心なり、神がキリストを十字架に釘け、彼をして人

に代てすべての義を行わしめ給いし後は、人は彼に近かんとして何等の制度、何等の儀式に依るの要なしとの事是なり。

とある。旧約聖書に燔祭[87]等の儀式のことが詳しく述べられているが、これは儀式を守れということでなく、罪から救われることが如何に困難であるかを示す為のものである。それ故イザヤ書 1 章 11、12 節に、

「主は言われる『あなたが捧げる多くの犠牲は、私に何の益があるか。私は雄羊の燔祭と、肥えた獣の脂肪に飽いている。私は雄牛あるいは小羊、あるいは雄やぎの血を喜ばない。あなたがたは、私にまみえようとして来るが、誰が、私の庭を踏み荒すことを求めたか。』

とある。燔祭に飽いている、雄やぎの血を喜ばない、お詣りすることは庭を踏み荒らすことだと言っているのである。ヨハネ伝 4 章 21 節～ 24 節の言を聞くと夜明けが来たように感ずる。この山でもエルサレムでもない所で父を礼拝する時がくるというのである。「霊と真とをもって父を礼拝する時が来る、そうだ今来ている。」と言って居られる。

人は生まれながらのカトリック[88]という諺がある如く、儀式主義に陥り易いものである。儀式を行うことは、所謂難行苦行であっても容易である。しかし、神の御心に適うようになることは非常に困難である。パウロは道徳を即ち律法を皆守っているモーセの十戒をちゃんと守っていると思っていたが、第十条のむさぼるなという言葉に接した時に降参した。罪は心の問題である。欲しいと思う時に既に盗んでいるのである。自分は罪人の首だ、何というみじめな人間だろうという人間が発し得た一番深刻な叫び声をあげている（ロマ書 7 章 17 節～ 24 節）。形式主義の異端はキリスト教が始まると共に始まった。異言[89]の問題がパウロを悩ました。ガラテヤ書は形式主義から福音を護る為の烈しい戦いである。ローマ帝国の迫害の下にある時は福音の純粋を保ち易かったが、ローマ帝国の保護を受けるようになったら堕落して形式主義に陥り、多く形式が附加されて中世の暗黒時代になった。それをルターが改革して、元の状態、純粋なる福音に戻したので、真理と自由の貴ばれる近代が起こったのである。しかしルターは教会制度と洗礼と聖餐と三つの形式を残した。それ故に今日キリスト教が無力になり、戦争を止めさせることも出来ず、唯物論的経済学に負けそうになっている。この時に内村先生は僅かに残った形式も除いて福音をほんとに純粋になしたのである。最も必要なものと思われている教会制度をも不要としたので、無教会派と言われてキリスト教の一つの宗派と考えられているがそうではなくて、ほんとのキリスト教、キリスト教そのものである。純粋のキリスト教である。

形式主義という異端は、啓示にのみ重きを置いて理論で検討することを忘れた為に生じたのであるが、理論にのみ重きを置いた異端を考えてみる。キリスト教は科学的ではないといって排撃する人があるが、これは科学も信仰も知らない人である。私は物理学を勉強したものであるが、物理学をやったことが信仰を持つのに大変助けになっている。おかげで処女降誕[90]も復活[91]も信ずることが出来た。今日の日本の学者は大部分信仰を否定しているが、そのために日本の学問も、教育も間違っているのである。キリスト教を非科学的という攻撃は恐るるに足りない。こういう攻撃こそ非科学的である。

一番手強いキリスト教の敵はペルシアの二元教[92]である。ペルシアの宗教はアフラマズダ[93]という光の神と、アーリマン[94]という暗の神と戦って光の神が勝つという教えである。この世に何故罪が存在するかということをよく説明出来るので中々有力な理論である。神が善であるなら悪魔を作る筈がないというのである。創造主なる唯一神というのが神についての最高の信仰であるが、それを少しく曲げて善悪二神を考えるのである。それは一見合理的に見えるが故にローマ時代にも勢力を得て居った。その一種であるミトラス教[95]というのが盛んになって、キリスト教がローマ帝国の迫害にあって苦しんでいる時に、キリスト教に取って代わりそうになった位である。またアウグスティヌス[96]が回心する前にマニ教[97]を信じて居った。これもペルシアの二元教の流れである。私はニーチェ[98]を研究しないので確かには言えないが、キリスト教を攻撃しようとしたニーチェにとって二元教は絶好の武器であったろうと思われる。それで「ツァラトゥストラ（ペルシアの二元教の宗教家、英語ではゾロアスターという）はかく語れり」という本を書いたのであろう。既に四世紀で解明ずみの問題を取り上げた所にニーチェの思考力の限界がある。頭のよい人でも信仰がないと間違いをしやすいものである。

聖書は悪魔も神の作り給うたものと教えている。ヨブ記の初めには神が悪魔を手先として用い給うことが記されている。また 40 章 15 節より 41 章にかけて、闇の神、悪の神を思わせる想像的原始動物、河馬とワニのことを詳しく述べて、これらも神が創造されたと言っている。

何故罪が実在するかということの最もよき理論的な理由は、神が人間と天使とに自由意志を与え給うたということである。神に背こうとすれば背き得る自由意志を与え給うて、その自由意志をもって悔い改めて、キリストの十字架によって潔められて、天国を形づくるものとなることが出来るのである。それ故悪魔は堕落天使と考えられる。イザヤ書 14 章 12 節に「黎明の子、明けの明星よ、あなたは天から落ちてしまった。もろもろの国を倒した者よ、あなたは切られて地に倒れてしまった。」とある。ミルトン[99]もパラダイス・ロスト[100]においてそのように悪魔を画いている。神が悪魔をも含めて、万物を創造なさったという真理は二元教より遙かに高い真理である。

なお罪が存在することについて、何故神が人間に自由意志を与え給うたかについては私の小論文「悔い給う神」（本書 1-1）でより詳しく論じている。

かくして人は御霊と知恵とによって最高の真理に達することが出来、純粋なる福音を護ることが出来るのである。内村先生の信仰、純粋なる福音はこのように最高の真理である。

学問は理論だけで出来ると考える人があるが、月に行って帰って来ることの出来るような高い学問は理論だけでは出来ない。理論はじきに行き詰まって、それを打開していくことは神からの啓示がなければ出来ない。理論だけで、人間の力だけで何でも出来ると思っていると間違いをする。人類に害を及ぼすようなことをしでかす。

今日は激動の世の中と言われている。これは経済学が間違っているからこうなったのである。自由主義経済[101]ということを、自分勝手に儲ければよいということだと解釈して、儲けるためには何でもするというようになったのでこのような激動の世の中になったのである。自由主義経済はアダム・スミス[102]から始まった。しかしアダム・スミスは信仰を持っていて、神がよいようにして下さるから、自由主義でよいとしたのである。それ故約 200 年間自由主義経済が発展して来たのである。ところが近頃は皆信仰を捨てたか、あるいは信仰が形式化して捨てたも同様になったので、この激動の世の中になったのである。先程のお話にも人間の終焉の時ということがあったが、私も同じように今日は自由主義経済終焉の時と数年来言って来た。

自分さえ儲かればよいという考えを捨てて「自分のことばかりでなく他人のことも考えなさい。」（ピリピ人への手紙 2 章 4 節）これは愛を別のことばで言ったのであるが、この聖書の教えに従わなければ行き詰まるのは明らかである。他人のため、社会のための経済活動でなければならない。神から離れたからこんなになったのである。今日ほど人が聖書の教えに帰らなければならない時はないのである。

（「森の宮通信」第 48 号、1977 年 4 月）

1-5　真理の極致なる福音

1977年4月24日、内村鑑三記念講演会（新潟労働衛生会館）においてのべたもの

内村先生は、真理を愛された方であります。罪の赦しの十字架の福音は、最高の真理であると知って、福音を信じて参ったのであります。「真理とキリスト教と、どちらを取るかと言えば、真理を取る。」と言っておられました。真理としてのキリスト教の確立が、内村先生の大きな仕事でありました。それで私は、今日は、「真理の極致なる福音」ということをお話したいと思います。

ヨハネ伝 14 章 6 節で、キリストは、「私は、道であり真理であり、命である。」と言っておられます。また、18 章の 37 節のピラトに調べられているところでは、「私は真理について証をするために生まれ、また、そのためにこの世に来たのである。」と言われました。それに対してピラトは、キリストに「真理とは何か？」という質問をしております。真理とは何か、ということは、非常に大きな問題であります。ピラトは、充分わからなかったのかも知れませんが、非常に大きな問題を、人類に対して投げかけたのであります。しかし、真理とは、むずかしい事ではありません。真理とは本当の事と言うことであります。事実もまた真理であります。学問とは事物をよく見て考えて、真理を探究することであります。宇宙の自然状態も真理であります。これを探究するのが自然科学であります。そして自然現象の間にある法則性を見い出しますと、それは、より普遍的であり、より高度な真理と言えるのであります。真理にも、高いもの低いものがあります。重要度も異なっております。しかしいずれも真理であるという点においては尊いものであります。

人間関係の真理は、道徳的真理であります。道徳は単なる社会秩序を保つための、人間の間の約束ではありません。超人間的な至上命令であります。自然科学的真理が、超人間的な客観的な真理であると同じように宇宙の真理であります。道徳的真理は真実という風に言われることがたくさんありますが、同じ事であります。真理に従って生きる事が真実であります。「神は真実である。」とそう聖書に書いてあります。ロマ書 3 章にありますが、神は、真理そのものであります。神は愛なりと言ってもそれは神の属性をあらわすことでなく、神は愛そのものであることを示すのであります。その如くに、神は真理そのものであります。

自然科学的真理も真実という意味を持っております。科学者は、それを自然の斉一という言葉で言いあらわしております。同一の原因には、同一の結果が生じるというのであります。科学的法則は、何時でもどこでも同じである、というのであります。これは、真理なる、真実なる神が宇宙を創造されたと考えて成り立つ思想であります。神があるという事を理論で証明できないと同じ様に、自然の斉一という事を、理論で

証明する事が出来ないのであります。

イエスは、御自分は「真理である。」と仰いました。神はキリストによって宇宙を創造なさったのであります。ヨハネ伝の初めにあります。子なるキリストと父なる神が一体であります故に、神が創造なさったという事は、キリストが創造なさったということであります。神が真理そのものであられるということは、キリストも真理そのものであられるということであります。それで、「我は真理である。」[103]そう仰るのであります。ピラトの前では「真理について証をする。」と言われましたが、真理そのものであられる方が、最もよく真理の証が出来るのであります。

ヨハネ伝 8 章 31 節には、「もし私の言葉の内にとどまっておるなら、あなた方は、本当に私の弟子なのである。」とあります。とどまるという事は、キリストの言葉が真理だと悟り、これを実践する事であります。その教えに従って生きる事であります。そうすれば、キリストの弟子となれるのであります。キリスト教は、神が作られたものでありますから、人間的な名前はいらないのであります。それで、初めはキリスト教という名前はなかった。「その道の者」とか、そういった様な言い方をして居りました。また、キリスト信徒という名前もなかった。使徒行伝の 11 章に初めて「弟子達をクリスチャンと言う事がアンティオケ[104]教会で始まった。」とあります。しかし、始まってもなかなかそれは行きわたらない様でありました。それで信徒のことを兄弟とか弟子たちと言っております。

この弟子という言葉は、ギリシャ語でマテーテースという言葉でありまして、これは英語の数学を意味するマスマティクスと同じ語源から来ており、学ぶ者という意味であります。英語で数学のことをマスマティクスというのは学問の基礎的なものだからです。日本でも昔から読み・書き・そろばんと言いまして、数学が学問の中の大事なものとされておりました。そういうものだから、数学の事を学問といってもいいような名前をつけたわけです。マテーテースとは学ぶ者、真理を学ぶ者、学問を学ぶ者という意味なのです。それ故、キリスト信徒は、真理を求め真理を学ぶ者であります。それでこのヨハネ伝 8 章 32 節には続いて「また真理を知るであろう。そして、真理はあなたがたに自由を得させるであろう。」とあります。キリストの所へ行くのが真理を知る一番良い方法であります。真理そのものであるキリストが、真理の証が最も良く出来るのであります。本当の学問をするのにはキリストの所へ行くこと、あるいはキリスト教の信仰を持つ事が最も良いのであります。

学問が、キリスト教の信仰のあるヨーロッパで非常に発達したという事は、偶然ではありません。余談でございますが、国会図書館の閲覧室に入る所の上の欄間の所に、「真理は、我等を自由にする。」という言葉が書いてあります。そしてその隣にその元のギリシャ語がありまして、その方は「真理が汝等を自由にする。」とキリストの言葉をそのまま書いてあります。日本語の方は「真理が我等を自由にする。」と聖書

を知らない人にもわかるように書いてあります。私の友人の藤尾正人君[105]という人が国会図書館に勤めておりまして、学問の意義を示す為にこの言葉を記すようにさせたのであります。そのギリシャ文字を書く時に、参考にいろいろ字体のことを教えてあげたそうであります。信仰のない日本の国会図書館にもこの言葉が記されてあるという事は、意義のある事だと思うのであります。そして、真理を得るとその人は自由を得るとイエス様は申されたのであります。コリント後書の 13 章の 8 節に「私達は、真理に逆らってはなにをする力もなく、真理に従えば力がある。」とあります如く、力を得て何でも出来る様になり、本当に自由になります。自由といっても我が儘勝手なことをすることは自由ではありません。それは罪の奴隷となる事でありまして、自由を失う事であります。本当の自由は私達が真理に従ってはじめて得るものであります。

聖書で真理と言っているのは、主として信仰的真理でありますけれども、科学的真理も同じであります。科学的真理に従わないと機械が動きませんし、実験が成功いたしません。ですから科学者は真理を重んじ、真理を愛し、真理を強く求めます。したがって科学者の中には信仰を持っている人が多いのであります。私が東京大学におりました頃でも、文科方面の先生には信仰を持っている人は少なくて、理科の方面の先生には、大分ありました。

学問の価値は、その応用にあるものではありません。科学を応用して物質文化を大変高めて来たのでありますが、もしそれが学問の価値であるならば、今日の公害問題等を考えると、学問など無い方が良いという事になります。学問が尊いのは、人間を真理を愛する様にさせ、ウソやごまかしを嫌いにさせるから、それで学問が尊いのであります。真理を愛し、真理なる神を信ずる様になる事が人格の完成でありますし、人生の目的であります。

道徳教育ということが叫ばれますけれども、徳目[106]をならべて暗記させても、何もならないのであります。学問を学んで真理を愛する様になり、ウソやごまかしが嫌いになる様になる、それが、本当の道徳教育であります。

真理に至る道が二つあります。理論による道と啓示による道であります。理論は普遍的でありますけれども、理論を進めて行く時に、あやまりが入り込み易いのであります。かつまた、理論には限界がありまして、神がいますかどうかという事は理論で証明できないのであります。啓示による道は、高い真理に達し得るのでありますが、しかし、神からの啓示か悪魔からの啓示か見分ける事が難しいこともありまして、迷信に陥り易いのであります。それで、この二つが助け合い、誤りを除いていくという事が大切であります。聖書は、この事を御霊と知恵と言っております。ステファノが、殉教の前に人々と議論いたしまして、知恵と御霊とで語っていたので、人々がそれに対抗できなかったと書いてあります。御霊と知恵によって、いかに確かに真理

に達し得るかという事が、明らかに示されて居ります。

カントはこの二つを理論理性と実践理性と名付けております。近代人は、理論で何でも解決できると思って、信仰を否定し、間違った判断をし、間違った学問をしております。それで私は、いつも科学的経済的判断よりも、信仰的道徳的判断の方が確かであると言っております。人間の理論の進み方には間違いが入り易い。それ故、人間は自分のおろかさを悟らなければ真理が得られない。間違い易い者だと自覚して謙虚になり、反省して間違いを正していかなければ、正しい判断は出来ないし、学問も出来ない。

ギリシャ時代にはソフィストという者がでました。非常に傲慢な人々でありました。彼らは「人間は万物の尺度だ。」と言っておりました。「真理は人間が作るもの。」そう言っておりました。それで、学問とは最もウソらしいものを最も本当らしく粉飾するものだと考えておったのであります。そのソフィストの間違った理論の代表的なものは、アキレス[107]と亀との競争の話、日本流に言えば兎と亀の競争の話であります。アキレスが亀の所に着くというと、亀は、いくら少しでも前に出る。また、亀の所へ着くと亀はいくら少しでも前に出る。亀に追い着けば亀が僅かでも前に出る。だからいつまでたっても追い着くことができないというのであります。だから永久にアキレスは亀に追い着けないと言っておるのであります。それは勿論間違いであることは明らかであります。私達も足の早い人が遅い人を追い越すのを、しょっ中見ております。しかしこの議論の間違いを指摘する事が難しいのであります。しかし数学の力を借りますとわけなくこの誤りを指摘できるのであります。

数学というものは、難しい関係をわかり易くしてくれるものであります。ですから数学というのは大変面白い、皆が、もっと好きになるべきはずのものでありますけれども、学問が試験でよい点をとるために行われておりますので、数学もそのためにやらせられるものだから嫌いになっておる様でありますが、このソフィストの間違いを、ちゃんと正すためには、数学の力がいります。

この場合は数学の中で無限級数、今は数列という言葉を使うのでしょうが、無限数列の理論を用いますと、誤りを示すことが出来ます。ある規則に従って小さくなっていく数を無限に寄せ集めますと、それは、必ずしも無限大になるとは限らない、小さくなるなり方によっては、ある有限の値になっていくのであります。無限大になることは、発散と申しますし、有限の値になることを収斂と言っております。で、例えば、1、その半分の 2 分の 1、その半分の 4 分の 1、そのまた半分の 8 分の 1、という風に半分半分に小さくなっていく数を無限に集めますと、無限大にならないで 2 になるのですから、仮にアキレスが亀の 2 倍の速さで走り、亀から 100m おくれていたとしますと、アキレスが亀の所へ行けば、亀は 50m 前に、また亀の所に行けば、今度は亀は 25m 前に出る。そのまた 25m の点に行けば、12.5m の所に行きます。段々

半分づつになって行くものを無限に寄せ集めるというと 2 になるのであります。ですから、100m が 1 にあたりますから、200m より大きくはならない。回数は無限でありますけれども、だけど段々小さくなっていって距離も時間も小さくなってしまうそれを寄せたものは 100m よりは大きくはならない。だから 200m 行く間では追い着くことが出来ないと言うことを言っているに過ぎないのであります。けれども、それを回数が無限だから、距離も時間も無限大だろうとごまかした所に、この理論の欠陥(けっかん)があるのです。真理など無いと考えているのでありますから、もう初めっからごまかすという悪意を持っていると考えてもいいと思うのであります。しかし、それでは学問が出来ない。人間は自分の愚かさを悟らなければ、学問も出来なければ人間としてちゃんと生きて行く事も出来ないという事を教えたのが、ソクラテスであります。その弟子のプラトンがこれを受け継ぎ、そのまた弟子のアリストテレスが発展させ、今日(こんにち)の学問の基礎ができたのであります。

アリストテレスの言葉に、「プラトンは友である。しかし、より大きな友は真理である。」[108]というのがあります。一口に言えはプラトンより真理を愛すると言うことであります。内村先生が「キリスト教よりも真理をとる。キリスト教と真理とどっちをとると言えば真理をとる。」と言ったその精神であります。プラトンは、アリストテレスにとっては、自分の目を開いてくれた恩人と言っていいか恩師と言っていいか、最も敬愛する先生でありますけれども、こと真理に関しては、プラトンに対してでも譲(ゆず)らない。真理でないならば、プラトンの言う事でも否定する。そういう態度をとる事、勿論(もちろん)それは、プラトン及びソクラテスの精神でありますけれども、そういう精神で学問をしたから、それで学問の基礎が出来たのであります。

自分の愚かさを悟り、多くの人の意見を聞いて誤(あやま)りを正して行くということが、学問をするのに絶対に必要であります。何よりも真理を愛する態度、そして誤(あやま)りを正すということを良くやっていきましたから、それで不完全な人間の知恵にもかかわらず、月にも行って来ることが出来る様(よう)な、学問を打ち建てることが出来たのであります。そして、反省するのに啓示(けいじ)が必要であります。前のアキレスと亀の競争でも理論だけでもってこの間違いを発見するのは、なかなか難しいのであります。謙遜(けんそん)になって、そして啓示(けいじ)を待つと、数学の無限数列の理論を用(もち)いれば打ち破ることが出来るという事が示されるのであります。ところが、今日(こんにち)の日本の学問は、ソクラテス以前でありまして、ソフィストの時代の様(よう)であります。自分の愚かさを悟ろうといたしません。そして信仰を否定して間違った考え方をしております。だから学問はだめになり、教育がだめになったのであります。

私は今、日本中の国立大学の学長を相手にケンカをしております。ほとんど全部の大学の学長が、共通一次試験[109]では入学試験の改善ができないと分かっておるのに、文部省[110]の方針だからといって、それに賛成してしまっておるのです。それは、自

分の都合のために真理を曲げることだ、水俣工場の廃液を猫に注射いたしまして、そして水俣病[111]と同じ症状が出るという事を実験で確かめておりながら、それを隠して工場の廃液をそのままにさせておったという医学者と同じだという事をいって、どうか反論してほしい。本当に大学の学長方が入試の改善になるとそう思って賛成しておられるならば反論してほしい、と言っておるのでありますけれど、どなたも反論して下さらない。本当に真理を愛する学者がいないのです。ソクラテス以前のソフィスト達の様な真理を曲げる大学の先生ばかりである様に見えて心配でならないのであります。私が、今日の日本の学問はソクラテス以前だと言いましたら、定年で退職なさいましたけれど、東北大学の真方敬道[112]という哲学の先生が「大変いいことを言ってくれた。」といって喜んで賛成してくれたのであります。現実に日本の学問は、情けない状態にあります。

理論の誤りは、愚かということでありますが、道徳的あやまりは、罪であります。理論理性的に、愚かを悟ると同様に、実践理性的に己が罪を自覚しなければ、人間は本当に生きることが出来ないのであります。人は、真の神を知れば、己が罪を知る様になります。予言者[113]イザヤが、初めて神に召された[114]時、イザヤ書 6 章にあります様に神を見た時の話ですね、セラフィム[115]が「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、万軍の主、その栄光は全地に満つ」と歌っているのを見たというその時であります、神様そのものは畏れ多くて見られない、神様の御裾だけを見たのでありますけれども、その時に聖なる神に較べて自分がいかに罪に汚れた者であるかを悟りました。神という霊的な光に照らされて、見えなかった罪が見える様になったのです。人は誰でも聖い神を知れば、自分の罪を悟るのであります。それですから、神は光である、キリストも光であるといわれるのであります。人間にとって、一番尊い美しい事は、己が罪を知り、悪かったということに気づきまして、砕けた悔いた心を持つことであります。詩篇 51 篇 19 節に「神は、砕けた悔いた心をかろしめたまわない。」[116]という言がありまして、18 節の「あなたは、いけにえを好まれません。たとえ私が燔祭を捧げても、あなたは喜ばれないでしょう。」に続いて居ります。お祭りをしても儀式をしても、神は喜ばれない。神の受け入れられるいけにえは砕けた魂です。この詩篇はダビデの歌といわれているものでありますけれども、神は砕けた悔いた心を最も喜ぶと共に、砕けた悔いた心を持ってキリストにすがれば、キリストの十字架で流された血によって潔められて、人間的にどんな潔い尊い人にも勝って、美わしくされるのであります。ですから人間にとって一番美わしい尊いことは、砕けた悔いた心を持つ事であります。これは、宇宙最高の真理であると私は信じます。誰でも、キリストの十字架によって、神が完全であられる様に完全にしていただけるのであります。イエスも山上の垂訓で神が完全である様に完全になれということを仰っているのであります。

人を真理から遠ざげるのは、自己弁護の精神であります。自分のことを何でも良く解釈しようとする、自分に利益を与えるものを真理だと思い正しいと思う。そして真理を曲げる様になります。この誘惑に打ち勝って、自分の本当の姿を見て、自分の罪を自覚するということは、真理を愛する強い愛がなければできない事であります。真理を求めることの最も強いものが到達する真理が、最高の真理であります。それ故、罪の赦しの十字架の福音が最高の真理であります。真理の極致であります。私は、数年前に東京で、内村先生の記念講演を致しました時に、内村先生が真理を本当に何よりも愛する人だということを言いました。それであるが故に、自分の罪を自覚なさって、そして罪の赦しの十字架の福音を信じられたという事を申しましたけれども、本当に真理を愛し真実を愛する事の強い人が、自分の罪を自覚する事になるのであります。罪の赦しの十字架の福音は、最高の真理でありますが、それは単なる一人よがりではないかという恐れがあります。昔から理論的証明が出来ない故に、独断であると決めつけられて参りました。しかし、理論だけで、高い真理に到達できない事はこれまで述べた通りであります。独断であるという批判は、恐れるに足りないのであります。しかし人は知らずして信仰の真理から離れてしまう恐れがあるのであります。信仰の真理は知るだけでは足りないのでありまして、実践されなければならない。その真理に従って生きていかなければならない。その中にあって真理が生きていなければならない。イエスが、我が言葉にとどまっていなければならないと教えられたのはその事であります。

自然科学的真理も、正しく実践されなければならない。そういう点において実践理性的な面もあるのであります。月にも行って帰って来る様な偉い学問も、正しく実践されなければ非常に恐ろしい兵器に使われる恐れがあります。アメリカとしては、金をかけてロケットのことを研究しておりますけれども、どうもただ月に行って来る様な学問を打ち立てるためだけでなくて、それをミサイル以上の兵器として使えるという見込みでやっているらしいのであります。物質文化を非常に高めたというその学問も、今日は公害を起こす事に使われているのであります。

理論的・科学的真理も、実践ということは大事でありますが、信仰の真理は一層実践ということが大事であります。生きていない形骸だけになってしまってはならないのであります。「人は生まれながらのカトリック」という諺がありますが、儀式主義に陥り易いものであります。内村先生がルターの残した教会制度と洗礼と聖餐の三つの形式を捨てて、真理としてのキリスト教を確立されたということは、非常に偉いことであります。しかし、いくら立派な信仰でも「無教会だからいい、私は無教会の仲間に入っているから安心だ。」としてしまっては、それはまた形式主義に陥った事になるのであります。自分の信仰は立派であると思ってしまうと、それは非常に危険であります。罪を感じなくなります。十字架によりすがる事を忘れる恐れがありま

す。

マルコ伝に、てんかんの子供をイエス様になおしていただこうといたしまして、父親が「信じます。不信仰の私を、お助け下さい。」と叫んだとあります。これは非常に深いことを教えていると思うのであります。信じてみると信仰の不足を感ずるのであります。真のイエスの十字架の救いが本当にわかると、キリストに対する愛の不足を感じます。十字架にすがることの足りなさを感ずるのであります。もっともっとすがらなければならない、キリストの愛は、もっと大きいのであります。御自身の生命を捨てて救って下さる程の大きな愛で愛して下さっているキリストを思うと、もっと愛さなければならないと感じますので、もっと信仰を増して下さい、という念願が強くなります。てんかんの父親の信仰が生きておったので、それで「信じます。不信仰の私を、お助け下さい。」との叫び声が自然に出て来たのであります。

バニヤン(117)の天路歴程(118)では「天国の入口の所に地獄に通ずる穴がある。」とあります。自分の信仰は偉いと思ってしまうと、もう信仰から脱落したのであります。それ故、常に信仰から落ちはしないかと反省することが必要であります。それで、イエス様も度々、後なるものが先に、先になるものが後にと、警告をなさっておられます。また、山上の垂訓の終わりの所では、非常に激しい言葉で「私に向かって主よ主よという者が皆、天国へ入るのではない。ただ、天にいます我が父の御旨をおこなう者だけが入るのである。」と言っておられます。御旨を行うとは、十字架を信ずるという事であります。なお続けて「その日には多くの者が、私に向かって『主よ主よ、私は、あなたの名によって予言したではありませんか、あなたの名によって悪霊を追い出し、多くの力あるわざを行ったではありませんか。』と言うであろう。」と。これは形式的には今日の言葉で言えば立派な信仰生活を行っているということであります。そういう人に対して、イエス様は、「その時、私は彼等にはっきり、こう言おう『あなた方を全く知らない。不法を働く者どもよ、行ってしまえ。』」と言われた。どんなに形式的に立派な生活をしていても、十字架にすがらなければ、「不法を働く者よ行ってしまえ。」とイエス様に叱られるのであります。それ故最も強く真理からはずれていはしないかと反省する者は、福音を信ずる者であります。最も強く真理を愛する者、最も強く真理からはずれていないかと反省する者の信ずる福音が、真理の極致であります

本当に学問をしようとする者、本当に人間として生きようとする人は、真理の極致なる罪の赦しの十字架の福音に必ず達すると確信するのであります。

1-6　ギリシャ文化とキリスト教

1976年3月21日、八王子第一回内村鑑三先生記念キリスト教講演会においてのべたもの

キリスト教が始まって四方に伝えられたのであるが、南北と東に伝えられたものは凋んでしまって、西に伝えられたものだけが、即ちヨーロッパに伝えられたものが非常に発展して、「宇宙稀に見る」と言ってもよい、高い文化を築き上げた。これは不思議な事実であって、よく検討しなければならない問題である。

人が真理に到達する道が二つある。一つは理論に由る道であり、他は啓示に由るものである。信仰を持たない人でもインスピレーションは大切であると言う。理論は普遍的であるが、これに由る道には限界がある。例えば、神があるかないかという問題は理論では証明できない。一方、啓示による道は高い真理に到らせるが、神からの啓示か、悪魔からの啓示か、はっきりしないことがあって、迷信に陥る心配がある。理論の限界を逸脱することもなく、かつ迷信に陥らなくて、真理に達する為にはこの二つの道を同時に進むことが必要である。即ち互いに他の道から反省し、検討し、誤りを正すことが必要である。

学問は理論的なものであるから、理論だけでよいように思われるが、うっかり理論の限界を乗り越えて誤った判断をし、学者的迷信に陥るようになる。マルクス[119]主義者は無神論という迷信に陥っているのである。進化論者は創造者の意志を否定する。意志の問題は進化論の理論を超えた問題である。そして内村先生が進化論者は意志を否定するからいけないと言うと、内村鑑三は意志という哲学の問題を科学に持ち込むからいけないと言う。その実、哲学の問題を科学に引っぱって来たのは進化論者で、意志は科学では否定も肯定もできないものであるのに否定して、否定することはこの問題を科学に持ち込んだことではないと思い違いをしている。

この二つの道のあることを聖書は、「御霊と知恵」といって示している。使徒行伝6章でステファノ等七人を選んだ時に「御霊と知恵とに満ちた者を」といって選んだ。またステファノは知恵と御霊とで語っていたので、反対者はそれに対抗できなかったとある。人は御霊と知恵とを働かせて非常に確かに真理に到達することができる。それ故に人々が対抗できなかったのである。御霊と知恵とは車の両輪の如くであって、両両相まって真理に到らせるのである。カントはこれらを理論理性と実践理性と言っているが、ついでに述べるが、カントは純粋な理論理性と実践理性を論ぜんとして「純粋理性批判」という本を書いたが、理論理性を論ずるだけで膨大なものとなったので、実践理性を論ずる為に別の「実践理性批判」という本を著した。それ故、本の表題としては前のを「純粋理論理性批判」とし、後のものを「純粋実践理性批判」とすべきであった。表題だけを見て理論理性が純粋な高尚な理性であり、実践理性

が不純な低い理性であるかの如く考えるのは誤りである。カントは実践理性こそ最高の真理に至らせる、より高い理性であるとしている。カントの有名なる、天上の星と人間の内なる道徳律をたたえる言は「実践理性批判」の結論の初めにあるのである。

キリスト教、即ち罪の赦しの十字架の福音はこの最も高い理性、即ち知恵と御霊とによって思考を凝らした結果の最高の真理である。この事は先程の岩島先生[120]の「求安録」の講演でよく示されたことである。学問は真理を愛し、真理を探究し、得た真理を集めたものである。それ故にほんとうに学問をすれば罪の赦しの十字架の信仰に到らざるを得ない。これは内村先生の強い確信であった。この信仰に至らないのは、啓示にのみ重きを置いて、理論を忘れて迷信に陥ったか、あるいは理論にのみ重きを置いて、理論的誤りを犯したかのいずれかである。初めに述べた進化論者の意志論は学者的誤りの例である。学者という者は賢そうで愚かな誤りをする。謙遜にならなければ学問はできない。

ギリシャ文化の発展の跡をたどって見たいと思う。ホメロス[121]のイリアスとオデュッセイアは紀元前 800 年より以前とされている。ソロン[122]の民主政治は前 600 年頃、テミストクレス[123]のサラミスの海戦は前 480 年、ペリクレス[124]時代がこれに続き、フェイディアス[125]のパルテノン[126]が着工されたのが前 447 年、ドイツの美学者ウィンケルマン[127]がギリシャ彫刻を「高貴なる単純、静かなる偉大」と評したが、それはパルテノンの建築にもあてはまると言われている。アイスキュロス[128]、ソフォクレス[129]、エウリピデス[130]の三大悲劇作家がそれに続き、次いでソクラテス(前 399 年死)、プラトン、アリストテレスによって学問が確立されて、ギリシャ文化が最高潮に達した。

ギリシャ文化の基調はデルフォイ[131]の神殿にかかげられていた「汝自身を知れ」という言である。ギリシャ文学の最高のものが悲劇であることは注目すべきことである。人間をよく見つめて、その矛盾を見てとったのである。ソクラテスはこの「汝自身を知れ」という言の意義を「自分の愚かさを悟れ」ということだと解し、自分の愚かさを悟ることが学問の始めであることを教えた。ソクラテス以前は、詭弁学派と訳されているソフィストの時代であった。真理は人間が作るもの、最も真理らしくないものを真実らしく粉飾するのが学問であるとされていた。これに対してソクラテスは人間は自分の愚かさを悟り、謙遜になり、真理の前に跪くようにならなければ学問はできない、学問を愛する、知恵を愛するのでなければならないと教えた。フィロソフィアという言がこうしてできたのである。これは知恵のみに由らず霊に由ることである。「ソフォクレスは賢い、エウリピデスはなお賢い、しかし万人の中で最も賢いのはソクラテスである。」というデルフォイの神託に対し、ソクラテスは自分は最も愚かであると思っているので、これはデルフォイの神託でも承服できないと

言って当時の名のある賢人達を訪ね、論争して、ここにソクラテスより賢い人がいると言って神託の誤りを実証しようとした。かくてソクラテスの賢人歴訪が始まったのであるが、そして賢人達はソクラテスと同じく、愚かであるが、賢人達は自分の愚かであることを悟らないでいる、ソクラテスは自分が愚かであることを知っているのでその点だけ賢人達より賢いので神託はやはり正しかったということは有名な話である。

ソクラテスのこの精神を弟子のプラトンが発展させ、そのまた弟子のアリストテレスがなお発展させたので学問の基礎ができて、今日の高い文化の基礎である学問が確立されたのである。アリストテレスの学問はすばらしいもので、その自然科学もアリストテレス以後二千年近くの間それ以上のものは出なかったほどである。ようやくガリレイ(132)の頃になってアリストテレスでは不充分であることがわかり、新たな実験、研究が始まって近代のすばらしい科学が発達したのである。

ソクラテスが真の神を信ずる信仰なくしてこのような理性を持ち得たことは驚異である。ギリシャの多神教の信仰が霊のみでなく、知恵をよく働かせたのでこのような高い信仰を持ち得たのであろう。

知恵を働かせれば多神教が不合理であることは容易にわかる。それから儀式主義、御利益主義も不合理であることもわかって来る。離散したユダヤ人のまわりに三種の人々が出来た。ユダヤ人の信仰に無関心な異邦人(133)のままの人々、ユダヤ人の一神教の信仰が合理的であると知って創造主なる神を信ずる人々、これらを聖書では神を敬う人々とか、敬けんなる人々と言っている。それから全くユダヤ人と同じになろうと割礼を受けた人々、これは改宗者といわれた。ソクラテスの場合はユダヤ人に接する機会が少なかったので、多神教を全く脱しきれなかったが、その知恵の故に真の神への信仰に近いものを持てたのであろう。

このようにしてギリシャ文化が発達して、自分の愚かさを悟らなければ人間は学問をすることもできない、人間として生きることもできないということがわかって来た時に罪の赦しの十字架の福音が伝えられたので、これを受けることができた。理論理性的に愚かさを悟るということは実践理性的に罪を悟ることである。愚かさを悟ることができるなら、罪を悟ることもできる筈であるが、道徳的水準が低かったのでこれに気付かなかった。そこへキリスト教の信仰が示されたので、罪の自覚が起こり、罪の赦しの十字架の福音が信じられたのである。

世界歴史は神の宇宙完成の経綸(134)である。神の御経綸の最重要のものは御子の十字架である。人を罪より救うには罪のない者の犠牲によらなければならない。罪のないものは神だけである。神が犠牲になって無になれば万物が無に帰する。それ故神の子が存在しなければならない。神と全く同じであり同時に別の存在でもあるものの存在が必然的となって来る。不完全な人間の親子でも二つが一つで、一つが二つとい

うことがかなりな程度に実現されている。神の場合は父と子の二位一体、これに聖霊を加えて父と子と聖霊の三位一体が完全に実現されている。神の子イエス・キリストの十字架上の死によってはじめて人が罪から救われるのである。これより他に人が罪より救われる道はない

それ故世界歴史はすべて、神の子の十字架の準備である。この準備として最もよく人に言われることはアレクサンドロス大王[135]の欧亜[136]にまたがる大帝国の建設によって、ギリシャ語が世界中に広まってどこの国でもその国の言語とギリシャ語が行われるという状態になり、それに引き続いて、ローマが強固なる世界帝国を建て、世界中が同一の言語、同一の支配者の下に在るという非常に珍しい状態がこの地球上に実現したことである。これは確かに不思議なことである。これはただ一度だけ二千年前に起こったのである。今日交通が発達したといっても自由にどこへでも行けるという状況でなく、また言語の問題で悩まされることを考えると確かに不思議なことである。そしてその為にキリスト教が非常に速く世界に拡まった。キリストが十字架につかれたのが紀元 30 年頃であるが、20 年で世界の主要都市にほとんど伝えられた。この二つのことは確かに最大の十字架の準備であった。しかし、これらに劣らない大きな準備はギリシャ文化が起こり、ギリシャ文化の基調が「汝自身を知れ」ということ、あるいはソクラテスの「自分の愚かさを悟れ」ということにあったことである。自分の愚かさを悟らなければ、自分の罪を悟らなければほんとうの学問もできないし、真の信仰を持つこともできない。従って人間として生きることもできない。

今日の文化はギリシャ文化とキリスト教の融合したものと言われているが、これがギリシャの学問とキリスト教の信仰と融合したものと考えることは当を得て[137]いない。キリスト教は「ヤハウェ[138]を畏れることは知識の初め」（箴言 1 章 7 節）とある如く元来学問も含めた高い文化をつくる力を持っていたのである。ギリシャ文化はそれを受け入れる準備ができたのでギリシャ文化のある所でキリスト教が大いなる発展をしたのである。内村先生の信じたキリスト教はこのような高い文化を作り得るキリスト教である。それで内村先生を記念するためにこの事を明らかにした次第である。

（「永遠の日本」[139]第 43 号、1976 年 6 月）

1-7　科学万能思想の誤り

1978年3月21日、八王子第三回内村鑑三先生キリスト教記念講演会においてのべたもの

科学万能思想は唯物論から始まる。唯物論は哲学史上で素朴的唯物論と言われていて、物事をよく考えない為に生じた誤りである。物は人間が直接見、触ってその存在を知るから確実であると言うが、人間が物の存在を知るのはその物の働きに依るのである。空気は見えないが、運動して、風になって働きをするからその存在が知られる。見るということも、その物が光を反射するという働きを持っているから見えるのである。触るといっても、その物の原子と手の原子との間には原子の大きさに比べれば相当の距離があって、直接触っているのではない。原子間の反発力で触った如く感ずるのである。神の存在も神の働きによって感ずるので、物を感ずるのと同じである。精神的なものを観念論[140]だと言って退けるのは愚かな誤りである。いくら近代の唯物論が学問的粉飾をしても、悪い意味の、よく物事を考えないという素朴的唯物論であることに変わりはない。唯物論は信仰を否定する。近代人は科学が進歩しない時代の人が死人の復活というような迷信に陥るので、現代人は科学の進歩のお陰で迷信に陥らないでいられるのだと自認しているが、復活を信ずるのは科学の進歩とは関係なく、物事をよく考えるか、考えないかによって定まる。使徒行伝 17 章のパウロのアテネでの演説の最後に「死人の中からよみがえらせ、その確証をすべての人に示された。」と言った時に、ある者たちはあざ笑ったとある。科学の進歩していない二千年前の人もあざ笑った。あざ笑うのは決して科学の進歩の故ではない。

いわゆる中世の暗黒時代になって、キリスト教が形式主義、儀式主義になってしまい、人間不在、神不在の宗教に陥ってしまったので、人間中心の文化を求めるようになり、ギリシャ文化は人間尊重、人間本位であると考え、humanism という言葉が出来て、宗教を嫌い、人間性を取り戻そうとする運動が盛んになった。これがルネサンス[141]である。そしてルネサンスは近代科学万能主義の基となった。

しかしこのルネサンス運動はキリスト教をも、ギリシャ文化をも誤解している。ギリシャ文化とキリスト教は互いに衝突するものではなく、本質において一致するものである。「汝自身を知れ」というのがギリシャ文化の基調である。これをソクラテスが「己れの愚かさを悟る」ことに解し、己れの愚かさを悟らなければ学問をすることも、人間として立派に生きることも出来ないと教えて初めて学問の基礎が出来、ギリシャ文化が発展したのである。この己れの愚かさを悟れということが、己が罪を自覚し罪の赦しの十字架の福音を受けいれるよき準備になっていたので、キリスト教がギリシャ文化の基礎のあるヨーロッパで非常に発展して高い文化を造ったのである。最も人を尊重するのがキリスト教である。人間を救う為に神の独り子を犠牲にする程、

また人間の命を全世界よりも重いと見る程人間を尊重するものである。形式主義に陥った中世のキリスト教会、人間をも神をも無視した法王、僧正等の職業的宗教家の宗教をキリスト教と思い違いをしたのである。キリスト教が悪いのではなく、形式主義に陥ったキリスト教会が悪いのであった。ほんとに人間を尊重するにはキリスト教に帰らざるを得ない。それ故にルネサンスは宗教改革に達せざるを得ない。しかし一部には人文主義[142]者として信仰に帰らずに進む人々もあった。宗教改革後も細々と humanism の運動はつづいていた。ルネサンスが近代科学万能思想の始まりのようであるが、これは信仰を失った教会を嫌うあまり、信仰に反するように見える科学を喜ぶようになったからである。こういう人々が科学万能思想を持つようになったが、科学万能思想は己れの愚かさをさとらないことであるので、科学の進歩を妨げる。科学の発達は信仰によっている。科学もキリスト教の土台がなければ発展しない。近代科学を発展させた人々は皆信仰を持っていた。ルターは必ずしも科学の進歩を認めなかったが、宗教改革によって信仰が本来の姿に帰ったので、真理と自由の尊ばれる近代が出現した。その為に 19 世紀になって科学が非常に進歩したので人間の愚かさを忘れて、この調子で行けば科学で何でも解決できるであろうという思想が起こって来た。特に進化論が出て、万物の創造が神の力を待たないでも可能と思えるようになったので科学万能思想が盛んになった。これは人間の知能の限界を忘れた、考えの足りない思想である。人間が真理に到達するには二つの途がある。聖書の言い方によると御霊と知恵である。理論と神よりの啓示との途である。カントは理論理性と実践理性と言っている。理論によっては道徳、愛、神ということは推論することが出来ない。理論理性はその働きの場に限界がある。その上理論を進めている間に誤りが入り易い。頭のよいと言われる学者でも時々過ちをする。頭のよいので有名なある物理学者が、学生が実験していて 96 と 69 とわからなくなって困ったという随筆を書いていたが、69 を逆さにしても 69 である。6 を逆さにすれば 9 になり、9 を逆さにすれば 6 になるが、同時に左右も入れかわるから、逆さにされて 9 になったものはもとの 9 の位置につき、6 になったものはもとの 6 の位置につくから 69 は 69 である。99 か 66 かわからなくなるということはあったであろうが、それでは面白くないと思って 69 と 96 にして却って間違ったのである。

もう一つの理論の進め方の誤りの例をあげる。ある生物学者が、「内村先生は進化論者が意志を否定するからよくないと言って、意志という哲学の問題を自然科学に持ち込んだから間違っている。」と言って批難した。しかし意志という哲学の問題を自然科学に持ち込んだのは内村先生でなくて、進化論者である。進化論では神の意志を否定も肯定も出来ないのに、否定したのは意志という哲学の問題を進化論に持ち込んだことである。それに気がつかないで内村先生が先に持ち込んだ如く考えてしまったので、人間の理論が誤り易いものであることをよく示している。人間は自分の愚か

さを悟り謙虚になり、誤りをしないように常に気をつけないと、ほんとに学問も出来ないし、信仰もわからなくなり、人間として生きて行くことも出来なくなる。

また理論はよく行きづまるものである。それを打開するには啓示が必要である。科学は理論だけでは発達しない。信仰のない人は啓示とは言わないで、インスピレーションという。湯川博士[143]が中間子を発見したのも理論をたどって発見したのでなくて、啓示によって示されたのである。あとからそれに理論の裏付けの出来ないものは神からの啓示ではなく、悪魔からの啓示である。理論の限界を越えたものは裏付けは出来ないが否定も出来ない。鰯の頭も信心から[144]という啓示は、理論で否定出来るので悪魔からの啓示である。啓示によって理論の行き詰まりを打開し、理論によってその真理が神よりの啓示であるかどうかを確かめる。このように理論と啓示と助け合ってほんとの高い真理に到達するのである。

人間の知恵はこのように不完全なものであるから、謙虚になり常に反省して誤りを正して行かなければならない。己の愚かさを悟らなければ学問は出来ないというソクラテスが学問の基である根拠である。科学万能思想を持っていては学問は出来ない。それ故学問の世界では協力ということが重要である。どの学問にも学会があって、そこで研究を発表し批判を求めて誤りを正して行くということをやっている。それだから不完全な人間の知恵にも拘らず、月に行って帰って来るという学問を打ち建てることが出来たのである。

弁証法は学問をするのに最もよい方法と考えられて、今日は猫も杓子もという言葉で言ってよい位、多くの人々が弁証法、弁証法と言うが、弁証法とは反対意見をよく聞くということである。弁証法という訳は少し悪いが、その原語は dialectics であってよく討論するという意味である。dialogue は対話という意味で、話しという意味のローグが講義という意味の lecture のレクティックになったものである。人間は愚かで誤りを犯し易いものであるが、反対意見を聞くことが誤りを見出し易く、自分の学説をよりよく完全に近づけることが出来るのである。自分の愚かさを悟らなければ駄目だということをソクラテス、プラトンを通して教えられたアリストテレスが学問をする最もよい方法として dialectics ということを考えたのである。それを近世になってヘーゲル[145]が見直して、ヘーゲル流の弁証法を作った。あるテーゼ[146]があるとする。その反テーゼを考え、そしてこれらを総合し、ジンテーゼを作る。これを正のテーゼと考えて、その反テーゼを考え、合テーゼを作る。かくして、正反合、正反合と弁証法を進めて行くと人間は高い真理に到達する。いずれにしても弁証法とは一口に言えば反対意見を聞いて自分の誤りを正すということである。反対意見を聞いて考え直して、前と同じ考えに戻っても、その考えは前よりも高められた優れたものになる。清水トンネル[147]にループトンネルがあって、グルッと廻って旧の所に戻るが、その時は 20m 位高くなっているようなものである。これがほんとの

aufheben[148]である。ところが今日の人々は反対意見を聞くのを嫌うようである。マルクス的の科学的弁証法をもって立っているソ連[149]が反対意見を述べるソルジェニーツィン[150]を追放するという稀代な事が行われている。ソルジェニーツィンはソ連の体制を aufheben してくれる貴重なものであるのに、追放するとはおかしなことである。日本の多くの学者も、弁証法弁証法と言いながら、反対意見を聞くことを喜ばない。それで日本の学問が発達しないのである。そして科学万能思想を持つという誤りを犯すのである。

19 世紀になって非常に科学が発達した。それで人間が高慢になり、科学万能思想を持つ恐れが生じたので神はこれを戒める愛の御手をお伸ばしになった。それは非ユークリッド[151]幾何学[152]の出現である。幾何学はナイル河の氾濫の跡をもとの区割りにするということから発達した学問であるが、ユークリッドがこれを整然とした真理の大系にまとめたのであって、証明できないが自明[153]と思われる公理[154]を仮定して定理[155]を証明し、その定理を用い他の定理を証明するという風にして立派な真理の大系統が築きあげられた。学問として最も立派なものである。ところがそのユークリッドの公理の一つであるところの、一点を通り一つの直線に平行な直線は一本あり、一本しかないという公理をやめて、無限に沢山平行線があるという公理をとると、全く別の幾何学の大系が出来るということがわかったのである。例えば、ユークリッドの幾何学では三角形の内角の和は二直角であるということはよく知られていることで有名な定理である。平行線が無限に引けるという公理を仮定するロバチェフスキー[156]の幾何学では内角の和は二直角より小さいということが証明される。そしてこの二つの幾何学はどちらがより確かだということはない全く同等であることが明らかになった。三角形の内角の和が二直角に等しいというのは絶対[157]の真理ではなく、ユークリッドの公理の上になりたつ相対的[158]真理であるということになった。最も完全な科学と思われていた幾何学が相対的な真理しか証明出来ないことがわかった。これは 1825 年のことで、進化論を中心として科学万能思想が最もさかんになる直前である。科学で何でも解決出来ると思い違いしてはならないことを示す愛の御警告である。1854 年にリーマン[159]が平行線が一本も引けないという公理を採用してまた別の幾何学を示した。

この幾何学では三角形の内角の和は二直角より大きいことが証明される。そんなことを言ったって一点を通り一つの線に平行な線は一本しか引けないではないかと言う人があるかも知れないが、それは平面だから一本しか引けないので、一葉双曲面という鞍状の面では何本でも引ける。また楕円面では一本も引けない。引けたと思っても、延長して行くと交わり平行線でなくなる。

ダーウィン[160]は 1844 年頃に既に進化論の思想を持ったが発表を躊躇していた。ウォーレス[161]も同じ学説を持っていることを知り、1858 年発表し、59 年に「種の起

原」を著した。ダーウィンがどの位科学万能的思想を持っていたかわからないが、科学を逸脱して哲学を科学に持ち込んだのはスペンサー[162]等の哲学者達である。半世紀前に非ユークリッド幾何学を出現せしめて、科学万能思想に陥らないようにとの神の愛の御警告にも拘わらず、愚かな人間は傲慢になり、科学ですべて解決出来ると思ってしまったのである。適者生存だけで、ニーチェの意志通りに進化するとは限らない。またニーチェの意志の如く超人に進化したとしても、不完全な人間の意志の如くなることが果たして善いか悪いかわからない。科学が人間の欲の為に悪用され、戦争をひき起こしたり公害問題に悩まされたりしているではないか。全知全能の神の意志がなければ宇宙は滅亡するのみである。

19 世紀後半の科学は科学万能思想的、非信仰的であったが、20 世紀になって非常に信仰的になった。1905 年にアインシュタインの相対性原理が発表された。時間空間の相対性が明らかにされ、科学万能主義者が考える如く時間空間が絶対的なものでないことがわかった。ついで量子力学[163]が起こり、自然の変化は連続ではなくて飛躍的であることがわかり、また不確定性原理が唱えられ、位置の変化と運動量の変化との積がプランクの常数 h[164]より小さくなれないことがわかって、運動量と位置とを同時に正確に測ることが出来なくなり、科学的因果律[165]が成立しなくなった。科学的因果律とはその運動についての微分方程式を解き、その解の常数に初期条件を入れると、その後の運動を正確に定めることが出来るというのである。運動を決める量は位置と運動量(質量 m と速度 v の積)であるが、位置を正確に決めようとすれば運動量を正確に決めることが出来なくなり、運動量を正確に決めようとすると位置が不正確になる。いくら初期条件を正確に与えても、正確に運動を決定することが出来ないことになった。

このように 20 世紀前半の科学は信仰的になったが、20 世紀後半になると生物学が再び科学万能的になって来た。オパーリン[166]は立派な学者であるが、蛋白質が自然に合成出来れば人造生命が出来ると誤って考え、原子蛋白質が出来たから、もう人造生命が出来たと同然だと言って、世界中の唯物論者が大騒ぎをした。しかし、10 年たち、20 年たつうちに、オパーリンの人造生命は忘れられてしまった。オパーリンの「生命の起原」が出版されたのは 1941 年である。

20 世紀も後半になると、また分子生物学[167]というのが始まって、遺伝子の分子的構造が明らかにされ、どういう遺伝子がどんな蛋白質を造るかということが明らかになり、遺伝子の組み換えも出来るようになった。学問としてはすばらしい業績であるが、人間の弱さでまた傲慢になり、人造人間が出来ると思うようになった。普通蛋白質を合成するには、高温高圧にするが、細胞内では常温常圧で、いとも易々[168]と合成される。実に不思議である。そしていつ合成が始まり、いつ終わるのか、その制御は如何にして行われるのかと考えると、学問が進めば進む程、未知の部分が多くなる。

それ故に益々神の創造の英知のすばらしい事を悟り、謙虚にならなければならないのに、科学で何でも出来ると思ってしまう。ニュートンの言った如く、「自分は海浜で小石や貝殻を拾っている小児に過ぎない。自分の前には未知の真理の大海が横たわっている。」という事がわからなければ学問は出来ない。単に頭がよいというだけでは学問は出来ないものである。

（「永遠の日本」第 51 号、1978 年 5 月）

1-8　キリスト教の真髄

1978年（昭和53年）6月18日、沖縄内村鑑三先生記念キリスト教講演会においてのべたもの

キリスト教の真髄は罪の赦しの十字架の福音である。完全に聖なる義にして愛なる神を知り、自分の事はよく解釈しようという偏見なしで自分を見つめる時は、誰でも自分の罪を自覚せざるを得ない。そして罪よりの救いを求める時に、十字架にかかり給いしイエスによる以外に救いはないことを悟るのである。そして全能にして愛なる神が実在するならば、十字架は歴史的必然である。宇宙を滅亡より救う第二の創造である。宇宙最大の真理である。イエスの十字架が歴史的事実であることを知り、主の十字架の血により罪より救われるという真理に従って生きるのがキリスト信徒である。このように生きることが霊とまこととをもって父なる神を礼拝することである。これが真理なるキリスト教である。キリスト教は儀式や形式のない宗教である。

内村先生のなさったことで一番偉いことは、真理としてのキリスト教の確立である。キリスト教は真理なるが故に信ずるのである。ほんとに真理を求めるなら、ほんとに学問をするなら、最期にはキリスト教の信仰に到らざるを得ないことを先生は生涯をもって実証なさった。真理とキリスト教と、どちらを取るかと言えば、真理を取るという信仰である。それ故に純粋の信仰を最後まで守り通すことができたのである。

内村先生の信仰を無教会派と言い、キリスト教の一つの宗派と見做されているが、これは誤りであって、キリスト教そのものであり、本来のキリスト教である。キリスト教には宗派というものはあり得ないものである。キリスト教は内村先生が信じられた通りのものである。キリスト教は偉い宗教家が編み出した優れた宗教ではなく宇宙の真理である。誰でもがこれが真理であることを悟り、この真理に従って生きて行かなければならないものである。

それ故に、キリスト教には特別の名称がなかった。「この道」とか、「ナザレ人らの異端」とか呼ばれた。「キリスト信徒」という呼び名もなかった。信徒を「兄弟たち」とか、「弟子たち」とか「聖徒」とか、「この道のもの」とか言った。「弟子たち」という語が多く使われたが、この「弟子」という語の原語は「マテーテース」であって、「学ぶ者」、「学問をする者」という意味である。キリスト教が真理であることをよく示している。

「クリスチャン」と呼ばれるようになったのは、シリアのアンティオキアであった、一般の人は、「クリストス」という語が、「救い主」を意味することを知らないで、「あの連中は、クリスト、クリストと訳のわからないことを言う人たちだ。クリスト野郎だ。」と悪口を言ったもののようである。「クレスチャン」と記された写本もある。「クレストス」というのは、「情深い」という意味であるが、「お人好し、だまされても

なお愛する。」という意味もあるので、こういう悪口を言われたらしい。御名のために恥を加えられるに足る者とされたアンティオキア教会の名誉である。「クリスチャン」という語は余り行われないで、聖書にはこの使徒行伝の 11 章の他には 26 章のアグリッパ王の言の中に一度出ているだけで、これも多分に「悪口」の意味がこめられている。

神は霊であるから、礼拝する者も、霊とまこととをもって礼拝すべきで、キリスト教には儀式も、その他形式的なものも伝統もいらないのである。サマリアのシカルの町の井戸端でサマリアの女に言われた、

> 「女よ、私の言うことを信じなさい。あなたがたがこの山でもまたエルサレムでもない所で、父を礼拝する時が来る。……まことの礼拝をする者たちが霊とまこととをもって父を礼拝する時が来る。そうだ。今来ている。父はこのような礼拝をする者たちを求めておられるからである。」
> （ヨハネ 4 章 21 節、23 節）

とのイエスの御言葉に、伝統にも形式にも縛られない新しい時代の到来を告げる響きを感ずる。内村先生の文章に次の如きものがある。

> 新約聖書の供する二大真理
>
> 新約聖書は吾人[169]に二個の真理を供す。二個の貴き真理を供す。
>
> 其第一は是れなり。即ち、神は霊なれば彼は時と所を以て制限さるべき者に非ず。アブラハム、イサク、ヤコブの神は我等の神なり。彼は又聖殿または会堂の中に祭込まるべきものに非ず。神は時間に於て永久なり、又空間に於て無辺[170]なりとの事是れなり。
>
> 其第二は是れなり。即ち、宇宙広しと雖も其中に正義の代用をなすに足るの儀式あるなし。神に納けられんと欲せば、割礼も無益なり。水の洗礼も無益なり。パンとぶどう酒とを以てする聖餐式も無益なり。神の霊は如何なる礼式に列するも降らず。神はまた何等の外形的儀式を設けて之を人に強ふることなし。彼の前に貴き者は砕けた心なり。神がキリストを十字架に釘け、彼をして人に代てすべての義を行はしめ給ひし後は、人は彼に近かんとして何等の制度、何等の儀式に依るの要なしとの事是れなり。
>
> 此二大真理の新約聖書に由って吾人に伝えられしあり。吾人は今やすべての恐怖を脱し、僧権、宗則、信条等に何の頓着することなく、「機に合う助けとなる恵みを受けんために、憚らずして恩寵[171]の座に来るべきなり。」
>
> （ヘブル書 4 章 16 節）〔1908 年〕

新約聖書は終始一貫して、伝統に縛られず、形式に捕らわれずに、霊と真とをもって神に従うことを教えているのである。神の独り子を人間の形をとって地上に誕生せしめ、その十字架の犠牲によって人を罪より救うという、「目がまだ見ず、耳がまだ聞かず、人の心に思い浮かびもしなかった」全く新しい途をとられたのであるから、伝統を破り、形式、儀式のない、まことの信仰を教えているのである。洗礼が行われておったことが記されておるが、これに捕らわれていてはいけないことを教えている。ヨハネ伝 4 章 2 節に、「しかし、イエスみずからが、バプテスマ[172]をお授けになったのではなく、その弟子たちであった。」とあり、コリント前書 1 章 13 節～ 17 節には、

> キリストは、いくつにも分けられたのか。パウロは、あなたがたのために十字架につけられたことがあるのか。それとも、あなたがたはパウロの名によってバプテスマを受けたのか。わたしは感謝しているが、クリスポとガイオ以外には、あなたがたのうちのだれにも、バプテスマを授けたことがない。それはあなたがたがわたしの名によってバプテスマを受けたのだとだれにも言われることのないためである。もっともステパナの家の者たちには、バプテスマを授けたことがある。しかし、そのほかには、だれにも授けた覚えがない。いったい、キリストがわたしをつかわされたのは、バプテスマを授けるためではなく、福音を宣べ伝えるためであり、しかも知恵の言葉を用いずに宣べ伝えるためであった。それは、キリストの十字架が無力なものになってしまわないためなのである。

とある。

ガラテヤ書では割礼無用論を力強く述べているが、これは洗礼にもそのまま当てはまることである。聖餐についてもキリストは、儀式として行えとは仰せにならなかった。記念とするように行いなさいとおっしゃったのである。イエスの十字架を思い浮かべることが大切で、単に儀式として行うことは、主のからだと血とを犯すことだと戒めている（コリント前書 11 章 23 節～ 27 節）。

教会組織も不用のものだと教えている。内村先生のある弟子が、教会信者の友人から、内村先生はもぐり[173]の伝道者だと言われた。教会組織から正式に任命されたのでないからという意味であろう。その弟子は直ちに反論して、「それではイエス様ももぐりだ。」と言い返したという話を聞いた。たいへん面白いことを言ったものである。マルコ伝 11 章 27 節～ 33 節に、大祭司、学者たちがイエス様を、もぐりだと批難して失敗した意義深い記事がある。また、パウロはガラテヤ書 1 章 1 節で、「人々からでもなく、人によってでもなく、イエス・キリストと彼を死人の中から甦らせた

父なる神とによって立てられた使徒パウロ」と言っている。イザヤ、エレミヤ、アモス等の預言者も皆、もぐりであった。却って、王から任命されたもぐりでない預言者は、偽預言者であった。長老、執事、教会等は、組織化されたものではなかった。前の内村先生の文章で、「僧権」といっている法王とか監督とかいっているものも不必要なものである。人は神の御前に平等である。ロマ書 3 章 21 節、22 節に、「しかし今や、神の義が律法とは別に、しかも律法と預言者とによって、証しされて現わされた。それは、イエス・キリストを信ずる信仰による神の義であって、すべて信ずる人に与えられるものである。そこには何らの差別もない。」とある。法王も監督も祭司も平信徒も、何らの差別がない。万民祭司である。大祭司のみ入ることの出来る至聖所等というものはないのであって、誰でも憚ることなく恵みの御座に到達することが出来るのである。

イエス・キリストはこのように伝統を捨て儀式を捨て、形式主義を破られたのである。特に、ユダヤ人が最も重要と考えておった安息日の伝統を破られた。「安息日は人のためにあるもので、人が安息日のためにあるのではない。」（マルコ伝 2 章 27 節）と仰せになった。大切な安息日の精神を忘れて形式化してしまって、滑稽と言わなければならない規則を作って、安息日を律法どおりに守ったと得々[174]としておったことを憤られたのである（マルコ伝 3 章 6 節）。最も信仰的な民族が最も非信仰的になったのである。人は形式主義に陥り易いものである。我らは最大の努力をして、神は霊であるから、礼拝する者も霊と真とをもって礼拝すべきであるという真理を守り通さなければならない。

キリスト教は元来内村先生の唱えられたとおりのもの、霊と真とをもって拝するものであるから人を動かす力があるので、救いを得させる神の力である。ローマ帝国の激しい迫害にも屈しないで、この世の権力と戦った。そして、とうとう 300 年たって、ローマ帝国の方が降参して保護するようになり、次いで国教とした。そうしたら、形式化が急激に進み信仰が堕落して、中世の暗黒時代となった。普通の歴史の本には一般に人々が宗教に熱心になり、凝り固まったので、何でも宗教第一とするので暗黒時代になったとあるが、これは誤りで、信仰が駄目になり、形式主義に陥ったから、暗黒時代になったのである。立派な教会堂が建てられたりして、外形上盛んであるように見えたが、そうではなかった。一体、内容と外形とは反比例するもので、内容がなくなるとそれをごまかす為に外観を飾るものである。内容のない一般の宗教は、外観を飾るだけの力でもある方がよいであろうが、しっかりした内容のあるキリスト教は、外形等は整わない方がよいものである。原始キリスト教は形式、儀式のない、霊と真とをもって礼拝するものであったから力があったのであるが、次第に形式的なものが付け加えられて来て、遂に中世の暗黒時代になってしまったのである。

これがルターの宗教改革によって、形式的な付加物が取り除かれて、原始状態に帰

り新たに力が加えられて、真理と自由の尊ばれる近代が現出したのである。そして、月にも行って帰るような高い文化を築いたのである。

しかしルターは、教会組織と洗礼と聖餐式との三つの形式を残してしまった。僅かに残ったこの形式主義に捕らわれて、今日のキリスト教が無力になってしまった。戦争を止めさせることが出来なくなった。また、唯物論的哲学に負けそうになっている。いくらマルクスが学問的に粉飾しても、唯物論はよく物事を考えない幼稚な誤りである。これに負けそうになるというのは、しっかりした信仰によって立たないからである。形式主義とは物質的なものに捕らわれることである。霊と真とをおろそかにすることである。形式主義、儀式主義に陥ることは、推論の基礎において唯物論を認めて推し進めることであるから、唯物論的経済学の攻勢に負けるのである。キリスト教が唯物論に負けるということはあり得ないことである。しっかりとした信仰の上に立たないからである。

内村先生は、このルターが改革し損なった点を成し遂げたのである。キリスト教を、神は霊であるから排する者も霊と真とをもって礼拝すべきであるというその真髄に戻された。これは偉いことである。もちろん、内村先生がルターより偉いというのではない。ルターは千年の伝統に縛られていた中世のヨーロッパでなしたのであり、内村先生は伝統のない日本で、しかも真理と自由との重んぜられる現代でなしたのであるから、ルターに比べたら遥かに容易であった。しかし、なさったことは偉いことである。内村先生の信仰によらなければ、世界は救われない。形式主義に陥ったキリスト教は世界を救うことが出来ない。世界は次第に内村先生の信仰に注意を向けるであろう。信仰を失ったが故に混乱状態に陥っている今日の世界は、内村先生の信仰でなければ救われない。

（「永遠の日本」第 53 号、1978 年 9 月）

【 註・Ⅰ章 】

---

(1) 石原兵永（1895 ～ 1984)、内村門下のキリスト教伝道者。この講演録が掲載された「聖書の言」は、石原が刊行していた聖書雑誌。石原は独立学園初代理事の一人で、1960 年の校舎火災の「復興感謝竣工式」では記念講演を行った。独立学園の旧職員・桝本華子は石原集会の会員であり、鈴木が桝本一家へ独立学園への赴任を依頼した際、桝本華子は石原などに小国行きを相談した。

(2) Issac Newton（1642 ～ 1727)、イギリスの学者。光のスペクトル、万有引力、微積分などの発見で知られる。リンゴの実が落ちるのを見て重力の法則を発見したという話が有名だが、このエピソードが事実かは不明。

(3) マタイによる福音書 5 章～ 7 章に収められているイエスの説教集のこと。山上の説教。イエスがガリラヤ湖畔の山上で弟子たちに語ったと記されているため、この名となった。

(4) キリスト教で、神またはイエス・キリストを指す呼び名。

(5) 神によってつくられたもの。

(6) Paul Gauguin（1848 ～ 1903)、フランス後期印象派の画家。晩年タヒチで描く。原文表記はゴーガン。

(7) つやのある黒みを帯びた紫色。

(8) あらゆるものに神が宿り、神と世界とは本質的に同一であるとする宗教観・哲学観。⇔一神論

(9) キリスト教における「三位一体」とは、三つのペルソナ（位格)、すなわち「父なる神」と「子なるキリスト」と「聖霊」は一体であるということ。父と子と聖霊は別の存在ではなく、唯一の神が三つのペルソナとなって現れたものであり、もとは一体であるということ。

(10) 人。人格。キリスト教で、知性と意志とを備えた独立の主体のこと。父と子と聖霊の三つの位格。元はラテン語で仮面の意。

(11) Alfred Tennyson (1809 ～ 1892)、イギリス、ヴィクトリア朝を代表する国民的詩人。

(12) テニソンの代表作の一つ。1833 年に死んだ親友をいたんで同年から執筆を開始し、1850 年に完成。喪失感や絶望から神の愛への信仰へと導かれていく魂の過程が描かれ、霊魂の不滅が歌われている。

(13)（1889 ～ 1944)、内村の門人であり、大正・昭和期の教育家。六高などを経て一高教授となった。学生時代から新渡戸稲造、内村鑑三に師事し、無教会キリスト教に入信した。著書に「幸福論」など。1923 年 1 月 9 日、内村の司式により結婚したが、翌年 3 月に生後 3 週間の娘と、同年 7 月に妻と死別した。

(14) イエスの 12 弟子の一人で、12 弟子の代表者とも言われる。

(15) 元は熱烈なユダヤ教徒でイエスの弟子たちを迫害していたが、復活したキリストの声を聞いて回心し、使徒として世界中に福音を宣べ伝えた。新約聖書に収められている多くの手紙の著者。

(16) 事実ではないこと。本当らしくつくられたこと。

(17) ナザレはイエスが育ったイスラエル北部の都市。ここでのナザレ人とはイエスのこと。

(18) James Russell Lowell（1819 ～ 1891)、アメリカの詩人、批評家、外交官。奴隷制や戦争を

批判した詩などを創作した。

（19）本書中、鈴木はこの言葉をアリストテレスによるものとして記しているが、真偽は不明。1-5中の註も参照のこと。

（20）人知（じんち）では知ることのできない神秘を、神自らが、人間に対する愛のゆえに、覆（おお）いを除（のぞ）いてあらわし示すこと。キリスト教やユダヤ教などで、神自らが、人知（じんち）を越えた真理を人間にあらわし示すこと。

（21）石原兵永（ひょうえい）が発行していた聖書雑誌。聖書の言（ことば）と読む人もいるが、石原聖書集会の大部分の人は聖書の言（げん）と読んでいたとの確認がとれたため、ここでは聖書の言（げん）と表記した。以後同じ。

（22）北海道の開拓指導者養成のための学校で、北海道大学の前身。1872 年に東京で開拓使仮学校として開校後、1875 年に札幌に移転し札幌学校となり、翌 1876 年に札幌農学校と改称した。Boys be ambitious.で有名な W. S. クラーク（1826 ～ 1886)が初代教頭。クラークが直接指導したのは一期生のみで、内村や新渡戸稲造などの二期生以降の生徒とは、在学中の直接的な関わりはなかった。

（23）1909 年発行の書籍。櫟林（らくりん）はクヌギ林のことで、内村が 10 年間暮らした角筈（つのはず）（現新宿区歌舞伎町近辺）のクヌギ林を指す。櫟林（らくりん）集については内村鑑三全集 16 巻 p.168 に、引用文は同 p.199 に収録。

（24）現在の「おたる水族館」のあたりと思われる。

（25）現在の漢字表記では「渺渺（びょうびょう）」。果てしなく広いさま。遠くはるかなさま。

（26）役人。国家公務員とほぼ同義。

（27）そのものの根底にある基本的な考え方や傾向。

（28）たましいや精神の次元のこと。

（29）内村鑑三全集 3 巻 p.38 以降に "Justification for the Korean War"の題で収録。内村自身による日本語版は、「日清戦争の義（ぎ）」の題で同 p.104 以降に収録。鈴木の英語表記と相違があるが、内村自身"(the) Justification of the Corean War"と記している箇所もある。（内村鑑三全集 5 巻 p.193、同 36 巻 p.409）

（30）神の言（ことば）を預かり、民に知らせ、悔（く）い改（あらた）めを呼びかけ、新しい世界観を示す人。特に旧約聖書では前 8 ～ 7 世紀におけるイスラエルの宗教的指導者のこと。

（31）ヨーロッパの中央南部の山脈。最高峰は 4,807m のモンブラン。

（32）藤井武（たけし）（1888 ～ 1930)、キリスト教伝道者。一時、内村鑑三の助手を務めた。

（33）中央情報局。アメリカ大統領直属の情報機関。Central Intelligence Agency の略称。

（34）一般に共通してみられる弊害（へいがい）。

（35）私有財産制を否定し、生産手段や生産物をすべて共有することによって貧富の差のない社会を築こうとする思想・運動。社会主義は、共産主義社会体制の第一段階とも呼ばれる。

（36）西洋古代最大の帝国。

（37）特に紀元 476 年の西ローマ帝国の滅亡から紀元 1000 年頃までのヨーロッパ中世前期のことを指す語。異民族の侵入やさまざまな圧政などによって文化の発達が妨（さまた）げられた、知的暗黒時代だったという見方による。

（38）Martin Luther（1483 ～ 1546）、ドイツの宗教改革者。原文表記はルーテル。

（39）一般に、キリスト教で信者となるための儀式。水で罪を洗い清め、新たな命へ入ることを意味すると言われる。ただし、無教会では洗礼の儀式を信者の必須条件とはしない。

（40）イエスの肉体の象徴（しょうちょう）であるパンと、イエスの血の象徴（しょうちょう）であるぶどう酒を信徒で分かちあうキリスト教の儀式で、現在も教会で一般的に行われている。いわゆる「最後の晩餐（ばんさん）」に由来する。

（41）哲学で、宇宙の根源は物質にあるとし、精神的なものはすべて物質の作用に基（もと）づくとする存在論上の立場。

（42）Rembrandt Harmenszoon van Rijn（1606 ～ 1669）、オランダの画家。

（43）内村鑑三全集 14 巻 p.434 以降に収録。

（44）Jean Calvin（1509 ～ 1564）、フランスの宗教改革者。カルヴァン。

（45）キリスト教のプロテスタント諸教派の別称。⇔旧教。

（46）William Ⅲ（1650 ～ 1702）、ウィリアム 3 世 。名誉革命で権利宣言を承認してイギリスの王位につき、議院内閣制への道を開いた。現在ではオラニエ公（オレンジ公）との表記が主流と思われる。

（47）Oliver Cromwell（1599 ～ 1658）、イギリスの軍人・政治家。清教徒（せいきょうと）。清教徒（せいきょうと）革命で議会軍を率いて王軍を破った。1649 年には国王チャールズ 1 世を処刑し、イギリス史上唯一の共和制を宣言。1653 年に護国卿（ごこくきょう）となった後は軍事独裁により政権を維持した。死後跡（あと）を継いだ息子リチャードは力不足で間もなく辞職。1660 年に王政が復古した。

（48）George Washington（1732 ～ 1799）、アメリカ合衆国初代大統領。

（49）William Ewart Gladstone（1809 ～ 1898）、イギリスの政治家。

（50）「グラッドストーン氏の死状と葬式」内村鑑三全集 6 巻 p.50 以降に収録。

（51）内村鑑三の著書。1894 年（明治 27 年）の内村の講演を書籍化したもの。2011 年に改版されている。鈴木在任中のみならず没後もしばらくは、独立学園の読書の授業の必読書だった。

（52）Thomas Carlyle（1795 ～ 1881）、イギリスの批評家・歴史家。

（53）Abraham Lincoln（1809 ～ 1865）、弁護士、アメリカ合衆国第 16 代大統領。1863 年に南北戦争下で奴隷（どれい）解放を宣言したが、翌年暗殺された。「人民の人民による人民のための政治」という民主主義の理念を説（と）いたことで有名。

（54）God must love the common people because he makes so many of them. リンカーンの言葉という説もあるが、そうでないという説もあり、真偽は不明。内村の解釈については、内村鑑三全集 28 巻 p.421 を参照のこと。

（55）Albert Einstein（1879 ～ 1955）、理論物理学者。ユダヤ系ドイツ人で、ナチスに追われて渡米。1921 年にノーベル物理学賞受賞。一般相対性理論（そうたいせい）、特殊相対性理論（とくしゅそうたいせい）などで有名。

（56）Napoléon Bonaparte（1769 ～ 1821）、ナポレオン 1 世、フランスの皇帝。多くの戦争を行った一方、産業の振興、学制の改革、行政や司法の再編成などを行ない、フランスの近代化を進めた。

（57）政池仁（まさいけじん）が発行した聖書雑誌。発行の経緯は本書 6-14 を参照のこと。

（58）内村鑑三全集 14 巻 p.53 に収録。

（59）天皇。

（60）特別に愛し、特別な待遇をすること。

（61）大日本帝国憲法（明治憲法）時代の、天皇や皇族など以外の一般の日本の人民のこと。

（62）多くの人。

（63）クロムウェルのこと。

（64）Queen Victoria （1819 ～ 1901）、イギリスの国力が強大になり、全世界に植民地を広げていった時代のイギリスの女王。

（65）（新共同訳）「キリストは、神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になられました。人間の姿で現れ、へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした。」（フィリピの信徒への手紙 2 章 6 節～ 8 節）

（66）ドイツ東部ハレ市にある大学。ハレ大学。

（67）Georg Ferdinand Ludwig Philipp Cantor（1845 ～ 1918）、ドイツの哲学的数学者。ハレの街にあるカントルの業績を記した碑には、「数学の本質はその自由性にあり」と刻まれているという。

（68）原書の表現は、現在では適切でないため改めた。以後同じ。

（69）同上

（70）（前 470 ～前 399）、古代ギリシャの哲人。

（71）（前 427 ～前 347）ソクラテスの弟子。アリストテレスと並んで古代ギリシア最大の哲学者と言われる。紀元前 385 年ごろ、学園アカデメイアを開設。各地から青年を集めて、研究と教育と著述に専念した。アリストテレスは 17 才でアカデメイアに入門し、プラトンから教えを受けた。

（72）（前 384 ～前 322）、プラトンの弟子であり、またその批判者。プラトンと並んで古代ギリシア最大の哲学者と言われる。アテネにリュケイオンという学校を開き、論理・自然・社会・芸術などの研究を行い、多方面にわたる学問に関する多数の著作を残した。

（73）（新共同訳）「それで、わたしたちは一人一人、自分のことについて神に申し述べることになるのです。」（ローマの信徒への手紙 14 章 12 節）

（74）矢内原忠雄（1893 ～ 1961）、経済学者。1937 年、日中戦争批判により東大教授を辞職。第二次大戦後、東大総長。内村門下で鈴木の先輩で、独立学園の最初の監事。1949 年 10 月 20 日と 1961 年 5 月 15 日に独立学園に来校し、講演を行った。また、1956 年 10 月 27 日には独立学園の新校舎建築を記念する講演を山形市で行った。矢内原についてや、矢内原と鈴木や独立学園との関係については、本書 6-5、6-6、7-3-19 および、小関充 （独立学園元理事長）、村山道雄（元山形県知事）等の註も参照されたい。

（75）南原繁 （1889 ～ 1974）、政治学者、東大教授、東大総長。内村門下で鈴木の先輩。1954 年 10 月 20 日に独立学園に来校し、講演を行った。南原についてや南原と鈴木の関係については、本書 6-8、6-9、8-10 も参照されたい。

（76）英文は"A CHRISTIAN BARBER"、和文は「基督信者の理髪師」の題で、内村鑑三全集 29

巻 p.263 ～ p.264 に収録。

（77）現在の函館市古武井町と思われる。

（78）Immanuel Kant（1724 ～ 1804）、ドイツの哲学者。近世哲学を代表する哲学者の一人。

（79）広くいきわたるさま。ある範囲におけるすべてのものにあてはまるさま。

（80）道徳・芸術・宗教的な感情など、文化・社会的な価値をともなう複雑で高次な感情のこと。

（81）ユダヤ教で、神から授けられ、遵守することを厳しく求められている規則。新約聖書では、イエスと時の権力者などとの間で律法論争がたびたび繰り広げられている。

（82）（1133 ～ 1212）、浄土宗の開祖。

（83）（1173 ～ 1262）、浄土真宗の開祖。法然の弟子。

（84）仏教の一派。法然が創始。自力教を排し、阿弥陀仏の本願を信じ、他力念仏によって極楽浄土に往生することを宗旨とする。

（85）内村鑑三全集 16 巻 p.42 に収録。

（86）男性の生殖器の包皮を環状に切りとる宗教的習慣。旧約聖書の創世記 17 章では、神がアブラハムに契約のしるしとして割礼を施すよう命じている。一方、新約聖書・ガラテヤの信徒への手紙でパウロは、「キリスト・イエスに結ばれていれば、割礼の有無は問題ではなく、愛の実践を伴う信仰こそ大切です」（5 章 6 節）、「割礼の有無は問題ではなく、大切なのは、新しく創造されることです」（6 章 15 節）などと記しており、割礼という儀式以上に大事なものがあることを説いている。

（87）古代ユダヤ教で、供えられた動物を祭壇で全部焼いて神に献げること。

（88）ローマ法王を長とするキリスト教会。カトリック教会に抵抗する形で生まれたのがプロテスタント教会。

（89）宗教的な恍惚状態に入って話す理解不能な言葉。神の霊によって語らされると信じられていた。

（90）聖霊によってマリアがイエスを身ごもり、出産したこと。

（91）特にイエスが十字架上で死んでから、3 日目に生き返ったこと。

（92）二元論。世界を善悪二つの原理（神）の闘争とみる宗教。ゾロアスター教、マニ教など。

（93）古代ペルシアのゾロアスター教の最高神。一切の善・正義・慈悲・秩序・光明の源泉。

（94）ゾロアスター教の悪神。アフリマン。アフレマン。

（95）太陽神・戦闘神ミトラを崇拝する、ペルシアで前 3 世紀頃起こった宗教。宇宙起源の問題と終末論においてローマの民衆をひきつけ、ローマ帝国全域に広まったが、キリスト教が国教に定められた後、その勢力は急速に衰えた。ミトラ教。

（96）Aurelius Augustinus（354 ～ 430）、初期キリスト教会最大のラテン教父・思想家。オーガスチンとも。原文ではアウグスチヌス、オウガスチンと表記。

（97）3 世紀にペルシアのマニが創唱した宗教。ゾロアスター教を母体とし、キリスト教・仏教の諸要素を取り入れた。光（善）と闇（悪）の二元論的世界観を根本に、禁欲的実践による救済を説いた。最盛期の 4 世紀にはローマ帝国、6 世紀以後は中国（唐）などにも広まったが、13 ～ 14 世紀に急速に衰えた。

（98）Friedrich Wilhelm Nietzsche（1844 ～ 1900）、ドイツの哲学者。神の死を宣言してニヒリズムの到来を告げた。なお内村は「ニイチェは天才である、多分近代に現はれたる最大の天才であらう」（内村鑑三全集 23 巻 p.196）と記し、部分的にはニーチェを高く評価している。

（99）John Milton（1608 ～ 1674）、イギリスの詩人。清教徒革命に参加、自由と民主制のために戦い、クロムウェルの共和政府にも関与。失明し、王政復古後は詩作に没頭した。

（100）*Paradise Lost*（1667）、ミルトンの 12 巻 1 万行余りの叙事詩。「失楽園」、「楽園喪失」。

（101）アダム・スミスが始めた古典派経済学のこと。

（102）Adam Smith（1723 ～ 1790）、イギリス（スコットランド）の経済学者。古典派経済学の始祖。

（103）ヨハネによる福音書 14 章 6 節を念頭に置いた言葉。この箇所は、文語訳では「我は途なり眞なり」、口語訳と新共同訳では「私は道であり、真理であり」と訳されている。ここでの鈴木の「我は真理である」という表記を文語的に読めば「我は真理である」と、口語的に読めば「我は真理である」と読むと考えられる。鈴木自身の読み方は不明。

（104）アンティオキア。トルコ南部の都市。パレスチナ以外で最初のキリスト教教団が組織された場所。現在は、トルコ語でアンタキヤ、あるいはアンタキアと呼ばれる。

（105）独立学園旧理事、独立伝道者。元国立国会図書館員。

（106）忠・孝・仁・義など、徳を分類した名目。道徳の細目。

（107）ギリシャ神話の英雄アキレウスのローマ名。ホメロスの「イリアス」の中心人物。不死身の身体の唯一の弱点である踵を射られて死んだ。人体のアキレス腱はこの神話に基づいて名付けられた。強者の致命的な弱点という意味の比喩も、この神話に由来する。

（108）鈴木はアリストテレスの言葉として記しているが、ニュートンの言葉として有名。アリストテレスの言葉をアレンジしたニュートンの言葉が有名になった可能性はあるが、詳細は不明。なお、以下がよく知られているニュートンの言葉。Plato is my friend, Aristotle is my friend, but my best friend is truth.「プラトンは私の友、アリストテレスは私の友。しかし、私の最大の友は真理である。」

（109）国公立大学への入学志願者に対し、各大学が実施する試験に先立ち、全国一斉で同一問題により行った試験。1979 年度～ 1989 年度まで実施。その後「大学入試センター試験」に改変され、2020 年度からは「大学入学共通テスト」へと改変された。

（110）現在の文部科学省。文科省。

（111）有機水銀中毒による神経疾患。四肢の感覚障害・運動失調・言語障害・視野狭窄・震えなどを起こし、重傷では死亡する。1953 年～ 1959 年に熊本県の水俣地方で、工場廃液による有機水銀に汚染された魚介類を食したことにより集団的に発生。1964 年頃、新潟県阿賀野川流域でも同じ病気が発生した。

（112）（1910 ～ 1987）、日本の倫理学者、東北大学名誉教授。

（113）予言者は、未来の物事を見通して言う人。預言者は、神から預けられた言葉を人々に伝えたり、悔い改めの呼びかけをする人。本書においては、予言者と預言者が厳密には区別されていない箇所もある。

（114）呼び寄せられること。また、死ぬことの意で用いられることもある。

（115）九天使中最高位の天使で、六つの翼を持ち神の玉座に仕える。熾天使。

（116）（新共同訳）「もしいけにえがあなたに喜ばれ／焼き尽くす献げ物が御旨にかなうのなら／わたしはそれをささげます。／しかし、神の求めるいけにえは打ち砕かれた霊。打ち砕かれ悔いる心を／神よ、あなたは侮られません。」（詩編 51 編 18 節～ 19 節）なお、この箇所は口語訳聖書では詩篇 51 篇 16 節～ 17 節となっており、鈴木の原文も 16 節～ 17 節となっているが、PDF 版では新共同訳以降の節にあわせた表記とした。

（117）John Bunyan（1628 ～ 1688）、イギリスの作家。

（118）*The Pilgrim's Progress*（1678, 1684）、バニヤンの小説。キリスト教的な寓意の旅物語。

（119）Karl Marx（1818 ～ 1883）、ドイツの経済学者・哲学者・革命家。エンゲルスとともに科学的社会主義の立場を創始、資本主義体制を批判し、終生国際的社会主義運動のために尽くした。マルクス主義は、マルクス・エンゲルスによって確立された思想体系。資本主義社会の矛盾を分析し、労働者階級の手による社会主義社会の実現を主張する。

（120）岩島公。高等学校教員、独立学園旧講師。聖書雑誌「永遠の日本」主筆。

（121）古代ギリシャの詩人。前 8 世紀頃の生まれ。「イリアス」「オデュッセイア」の作者とされるが、この詩人が実在したか、この二作の作者だったかについては諸説がある。

（122）（前 640 頃～前 560 頃）、ギリシャ七賢人の一人。アテナイ社会の危機を救うために貴族と市民の間に立って改革を断行した。

（123）（前 524 頃～前 462 頃）、アテナイの将軍・政治家。自国を古代ギリシャ第一の海軍国とし、前 480 年にペルシア艦隊をサラミス近海で破った。

（124）（前 490 頃～前 429）、古代ギリシャ、アテナイの政治家。前 460 年頃民主派の指導者として政権を掌握。民主政治を徹底させ、アテナイにペリクレス時代と呼ばれる黄金時代を実現した。

（125）（前 500 頃～前 432 頃）、古代ギリシャの彫刻家。古典期彫刻の完成者。

（126）アテネのアクロポリス上にある神殿。紀元前 438 年完成。

（127）Johann Joachim Winckelmann（1717 ～ 1768）、ドイツの美学・美術史学者。鈴木の「高貴なる単純、静かなる偉大」という和訳の原語は"edle Einfalt und stille Größe"（英語では "noble simplicity and quiet grandeur"）と思われる。

（128）（前 525 ～前 456）古代ギリシャの三大悲劇詩人の一人。

（129）（前 497 ～前 406）古代ギリシャの三大悲劇詩人の一人。

（130）（前 485 ～前 406）古代ギリシャの三大悲劇詩人の最後の人。

（131）古代ギリシャのパルナソス山麓の町で、アポロンの神殿があった地。世界遺産。

（132）Galileo Galilei（1564 ～ 1642）、イタリアの天文学者・物理学者・哲学者。近代科学の父。コペルニクスの地動説を是認したため、宗教裁判に付された。

（133）外国人。異国人。聖書では、神に選ばれた民であるユダヤ人が、異教徒を自分たちと区別して呼んだことば。

（134）国家を治めととのえることや、そのための施策のこと。

（135）（前 356 ～前 323）、大王。20 歳で即位、ギリシャを支配し、シリア・エジプト・ペルシアを

征服、さらにインドに攻め入ってバビロンに凱旋。ギリシャ文化をはるか東方に伝播させた。アレキサンダー大王。

（136）欧羅巴と亜細亜。

（137）当を得る。道理にかなっていること。

（138）聖書の神。万物の創造主で統治者。かつてはエホバと表記された。本書において鈴木はヤアウエとも記している。ヤーウェ。

（139）岩島公が主筆の雑誌。

（140）本書で観念論は、カントなどが論じた哲学的な論としてではなく、「頭の中だけでつくり出した、現実的ではない考え」の意で用いられていると思われる。

（141）再生の意。13 世紀末から 15 世紀末にかけてイタリアに起こり、次いで前ヨーロッパに波及した芸術上および思想上の革新運動。

（142）キリスト教会の権威や神中心の価値観から人間を解放することを目指した運動。ギリシャやローマの芸術などの研究を通じて普遍的な教養を身につけ、それによって人間の尊厳を確立することを目指した。

（143）湯川秀樹（1907 ～ 1981）、京都大学教授。中間子の存在を予言し、素粒子論展開の契機を作った。核兵器を絶対悪と見なし、平和運動に貢献した。1949 年にノーベル物理学賞受賞。

（144）鰯の頭のようなつまらないものでも、信仰すると、ひどくありがたく思える、という意味のことわざ。

（145）Georg Wilhelm Friedrich Hegel（1770 ～ 1831）、ドイツ観念論哲学の代表者。

（146）ある命題・主張を肯定的に提出すること。また、提出された命題・主張。定立。ヘーゲルの弁証法は、定立（テーゼ）・反定立（アンチテーゼ）・総合（ジンテーゼ）の三段階進行。

（147）群馬・新潟県境にある清水峠の南方、茂倉岳の下を貫通する全長 9.7km のトンネル。1931 年開通。

（148）アウフヘーベン。ヘーゲル哲学（弁証法）の用語。日本語では止揚、揚棄と記す。物事が低い段階の否定を通して高い段階へと進み、より高い段階で統一される際、高い段階のうちに低い段階の実質が保存されること。あるものを否定しつつも、より高次の段階で生かし、保存すること。

（149）ソビエト社会主義共和国連邦の略称。ほぼ、現在のロシア連邦。

（150）Aleksandr I. Solzhenitsyn（1918 ～ 2008）、ロシア（ソ連）の小説家。1970 年にノーベル文学賞受賞。ソ連当局を批判したため、1974 年に国外追放となった。1990 年に市民権を回復し、1994 年に帰国を果たした。

（151）Euclid、紀元前 300 年頃のギリシャの数学者。

（152）幾何学は、数学の一部門。物の形・大きさ・位置・その他一般に空間に関する性質を研究する学問。その方法・対象・公理系の異なる種々の分科がある。ユークリッド幾何学とは、ユークリッドが大成した幾何学。公理は結合・順序・合同・平行・連続の 5 群に整理される。非ユークリッド幾何学とは、ユークリッド幾何学における平行線の公理を否定し、他の形の平行線の公理を採用することによって成立する幾何学。

（153）何らの証明を要せず、それ自身ですでに明白なこと。

（154）数学・論理学で、自明な真理として認められ、他の定理（ていり）や命題を証明する前提となる根本命題。

（155）公理（こうり）を基礎として真であると証明された理論的命題。

（156）Nikolai Ivanovich Lobachevskii（1793 ～ 1856）、ロシアの数学者。非ユークリッド幾何学（きかがく）の創始者。

（157）絶対的。何物（なにもの）とも比較したり置き換えたりできず、また、他からどんな制約も受けないさま。⇔相対的

（158）物事が他との関係や比較の上に成り立つさま。⇔絶対的。

（159）Georg Friedrich Bernhard Riemann（1826 ～ 1866）、ドイツの数学者。非ユークリッド幾（き）何学（かがく）の一つ、リーマン幾何学（きかがく）を体系づけた。リーマン幾何学（きかがく）は一般相対性理論（そうたいせい）に応用された。

（160）Charles Robert Darwin（1809 ～ 1882）、イギリスの生物学者。進化論を先に立って提唱し、生物学・社会科学および一般思想界にも影響を与えた。

（161）Alfred Russel Wallace（1823 ～ 1913）、イギリスの博物学者。ダーウィンと同時に進化論に関する論文を発表した。

（162）Herbert Spencer（1820 ～ 1903）、イギリスの哲学者・社会学者。ダーウィン進化論の影響のもとに、あらゆる事象を単純なものから複雑なものへの進化・発展としてとらえ、生物・心理・社会・道徳の諸現象を統一的に解明しようとした。その哲学思想は明治前半期の日本に大きな影響を与えた。

（163）素粒子（そりゅうし）・分子・原子など、微視的（びしてき）な物体の物理現象を扱う力学（りきがく）。

（164）プランク定数。量子力学に現れる基礎定数の一つ。

（165）哲学で、すべての事象は必ず原因があって生じるという法則。

（166）Aleksandr Ivanovich Oparin（1894 ～ 1980）、ソ連の生化学者。

（167）生命現象を分子的側面から解明する生物学。特に遺伝子の働きに関係する核酸（かくさん）や蛋白質（たんぱくしつ）の構造・生成・変化などを、分子のレベルで解明する研究が中心。

（168）原書表記は安々だが、文脈を考慮し改めた。

（169）わたくし。また、われわれ。

（170）かぎりのないこと。広大で果てしのないこと。

（171）めぐみ。いつくしみ。キリスト教神学（しんがく）で、神の恵み。罪深い人間に神から与えられる無償の賜物（たまもの）。

（172）洗礼のこと。

（173）法を犯（おか）して、また許可などを受けないで仕事・商売などを行うこと。また、ある集団の一員とは認められないこと。

（174）いかにも得意そうなさま。